学校）に在籍したことが記録に残っている。小学校四年の時、母を失い、家業を助け、幼い弟妹の面倒をみたりして苦労したようである。

小学校五年で中退し、札幌の小泉商店の店員を経て帰郷し農業に従事したが、生来の音楽好きから大正三年に音楽家を志して滝川を離れた。小樽の森音楽学校に学んだ後、欧米航路の客船バンドに加わり本格的なジャズ楽士となる。その後、山田耕作・近衛秀麿等の知遇を得て、新交響楽団（N響の前身）に入り、更に日本コロムビアの専属として歌謡曲の作曲、編曲に従事し、数多くの作曲をしている。数多い作曲の中で、上海夜曲、別れても、高原の月、悲しき竹笛などが有名であるが、特に昭和十五年に発表された「めんこい仔馬（サトー・ハチロー作・唱二葉あき子）」は、当時全国を風靡して愛唱されたものである。昭和三十三年東京で死去。

〈資料　仁木他喜雄顕彰歌碑建立記念コンサートのパンフレット及び、土井恒隆調査資料より〉

こうした郷土出身の著名な作曲家の存在を知った東滝川の住民は仁木他喜雄を顕彰すべく、仁木他喜雄顕彰歌碑建立期成会（会長井上正雄）を組織し、平成二年の滝川市開基一〇〇年記念の協賛事業として有志から寄付金を募り、また、北の生活文化振興事業としての補助も得て、東滝川駅前に仁木他喜雄顕彰歌碑、通称「めんこい仔馬の碑」を建立した。歌碑は、仁木他喜雄と親交のあった俳優の森繁久弥が碑銘を揮毫し、めんこい仔馬の歌詞は二葉あき子が書き、その下に楽譜も彫りこまれており、押しボタンによって内蔵されたテープでメロディが流れるようになっている。なお、除幕式には他喜雄とゆかりのある二葉あき子も参列している。この歌碑建立の発端となったのは、郷土史家の土井恒隆の史跡掘り起こし活動によることも記録に留めたい。なお、歌碑のデザインは、東栄小学校教頭川西勝になるものである。

第三節　記念碑・記念像等

第一節の滝川市文化財や、第二節の史跡標柱のほかに、市内には公共団体をはじめ民間・宗教団体あるいは個人が建立した記念碑や記念像、モニュメントなどが数多くある。

これらは、いずれも滝川市発展の過程を探るうえからも貴重な史跡である。現市史上・下巻には、こうした史跡について各編章節の中で関係した分についてその都度とりあげ記載しているが、まとめた記述はない。本巻では、これら史跡などを一括してとりまとめ、今後の史跡研究の手がかりとなるようつとめた。

また、本節では、農業関係を除いて集録し、その分類も地域別として史跡めぐり、観光などの便宜をはかった。なお、農業関係については、その数も多いので第四節に集約している。

1　空知太地域

国木田独歩の碑　滝川公園の中央、池のほとりに建てられてい

る。碑は三回建て替えられている。最初は昭和七年五月、石黒白萩・白井敬三らが中心となり、滝川歌人会が三浦屋敷跡に尺角一二尺の青木で建立、岩見紫川が碑銘を書いている。二回目は、昭和十八年八月、独歩の足跡研究家である滝川駅勤務の工藤鉄男が自費で一五尺のトド松の木碑を建て、滝川中学校勤務の畑中順太郎が碑銘を書いた。三回目は、昭和二十五年九月二十五日、滝川文化協会常任理事根井清を中心とした、独歩の碑建設期成会が建立した。

碑名「空知川の岸辺」は、日展審査員で一水会所属の中村善策が揮毫している。この碑建立に際しては、篤志家の寄附に頼らず、滝川・砂川両町の助成の他に、近隣町村の小中学生に記念鉛筆の販売や、映画会を催してその興行収益などで賄ったと言う。

明治文壇の奇才と称せられる国木田独歩が、その愛人佐々木信子と恋の逃避行をし、愛の巣を北海道に求めようと単身北海道に渡って来たのは彼が二五歳の時である。道庁を訪れたところ、「空知川のほとりがよいでしょう」と紹介され、明治二十五年九月二十五日空知太駅で下車、旅館「三浦屋」で休憩した。ここで、旅館主三浦庄作に教えられた通りすぐに引返し、歌志内から山越えして空知川に出たのである。夢を追う多感な青年独歩は、空知川付近の大自然に感嘆しながらも北の大原始林を眼のあたりに見て、到底自分には開拓する力はないことを悟ったのである。かくして、恋と文学の両立を求めた空知川原野開拓の夢はむなしく破れ、再び東京に引返したのであった。空知川についての彼の第一印象は、その著書「空知川の岸辺」「独歩書翰」「欺かざる記」などに、雄大な空知の自然美をあますことなく描写している。また、開拓間もない空知太のたたずまいや、歌志内炭鉱社宅街のにぎわいなども、文人の目を通した表現によりうかがい知ることが出来る貴重な文献でもある。

石川啄木の歌碑　滝川公園の西側太鼓橋のほとりに建てられている。碑には、歌人小田観蛍が書いた「空知川雪に埋れて鳥も見えず　岸辺の林に人ひとりゐき」と、啄木の歌が刻まれている。

この歌碑は、昭和二十五年に作品の生まれたゆかりの地、空知大橋のたもとの金比羅神社境内に建てられたが、昭和四十六年に現位置に移したものである。建立したのは、独歩の碑と同様、滝川文化協会・滝川歌人会が中心となり、市内各界の協力援助によった。

薄幸の歌人石川啄木と滝川とのつながりは、明治四十一年一月、彼が小樽日報社から釧路新聞社に転職する途中、ここを通過した時詠んだ短歌である。一月二十日十時三十分岩見沢を出発、砂川で昼食、その日のうちに旭川に着いたと彼の日記にある。たぶん、午後になって空知大橋の下流の鉄橋を通過する時、雪に埋れた空知川を望見して生まれた作品であろう。賑やかな小樽の街から道東の釧路に赴任しなければならなかった彼の心情もうかがい知れるような作品である。

北海道四十七義士墓と、四十七義士建立寄付者碑

いずれも空知太墓地の北泉岳寺境内にある。空知太墓地は、現在行政的には砂川市に属するが、開村当時は滝川村にあり、後に滝川・砂川の共同墓地として認可され現在に至っている。

北泉岳寺の旧名称は泉学寺である。住職皆上誠信は、祖父であ

り、かつ先代住職でもある皆上正学の遺志を継ぎ、昭和二十七年三浦光正と諮って北海道四十七義士の墓建立のため発起人会を組織した。

まず、募金を始めるとともに、泉学寺を改めて北泉岳寺とすること、また四十七士の墓の土を分霊とし、東京高輪泉岳寺と同じ墓を再現することを目ざして行動に移ったのである。発起人会を、北海道赤穂四十七義士霊地世話人会と改め熱心に運動を展開した結果、ついに目標は達成された。昭和三十年十二月十四日義士打入りの日を期して起工式を行い、三十一年工事完成、七月十四日に開眼供養を行った。完成後は毎年十二月十四日盛大な義士祭を行い名物の一つとなっている。なお、義士祭は、滝川市と砂川市が交代で執り行うこととなっている。また、寄付者名碑は完成を記念して建立されたものである。

空知太の延命地蔵尊　空知太にある第一・第三小学校の学校林入口、国道十二号線から東に僅か入った北海灌漑用地内に建てられている。この地蔵尊建立の由来は、そうらっぷち第七号に、国兼昇（滝川町史編集者で、当時第一小学校の首席訓導）が詳細に書いている。昭和七年十月十八日、滝川第一小学校は折からの好天に恵まれて、一・二年は滝川公園、三・四年は学校林、五・六年は新十津川里見峠と三方面に分かれて遠足を実施した。

学校林に行った四年生某女は、昼食後の自由遊び時間に水が欲しくなり、友だちと三人で、引率教師にだまって水汲みにでかけた。はじめは農家に行こうと思ったが遠いので灌漑溝から汲むことにした。この灌漑溝は幅五メートルくらい、しかも、しろかきの最盛期で水かさも多く、三人で手をつなぎ恐るおそる水筒に水を入れようとした途端に水筒が流されてしまった。とっさに某女は友だちの手を振り切って水筒をとろうとしたが、灌漑溝に落ちて流されてしまったのである。引率教師はじめ、付近の農家の人たちも懸命に探したが発見できず、急を聞いて滝川町救護團、滝川町消防組の人たちも下流まで探したが結果は空しかった。保護者会（会長神部為蔵、副会長広部伊織）でも夜に緊急役員会を招集し、今後の捜索を協議し、以後数日にわたって探した。五月二十三日、転落してから六日目に砂川の焼山付近でようやく発見された。その後、保護者会の正副会長の発案で、供養と今後の水難防止をはかるため地蔵尊を建立することになり、第一・第三の両小学校児童、生徒から、ひとり一～二銭の浄財を募った。総額一二円余の拠金があり、石工の山崎鶴吉に依頼するとともに、北海土功組合の諒解を得て、現在地に延命地蔵尊を建立した。八月十三日に遺族他、関係者、教職員、児童生徒代表が参列、故人の霊を弔い、事故絶滅の祈願をしたのであった。

南靠山開拓団殉難者碑　四十七義士の墓のすぐ南側にある。敗戦の混乱で犠牲となった満州開拓団殉難者慰霊のために建てられた碑である。この開拓団は、北海道北見地区と樺太出身者で構成され昭和十三年三河省依蘭県南靠山地区に入植した。二〇〇世帯八〇〇人で入植したが、昭和二十年八月ソ連軍の参戦により二七六人死亡、ほか多数の行方不明者を出すという悲惨な結末を迎えた。この開拓団の副団長であった大草一二三と、団員の斉藤喜蔵らも多くの肉親

を失い帰国、滝川に落着いた。昭和三十四年、雲海寺で営まれた慰霊祭をきっかけとして慰霊碑建立の計画がもちあがり、大草・斉藤は生存者や遺族に連絡するとともに市内有志にも協力を求め、更に市議会に陳情するなど運動の結果二五万円の資金を捻出し、三十五年着工、翌三十六年三月除幕式を行った。

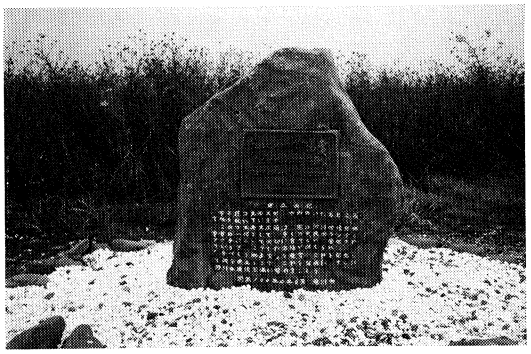
碑は、高台北の方角を向き、はるかソ満国境を望んで建てられている。われわれの住む身近かなところにも戦争の悲劇の爪跡が残されているのである。

2　空知大橋、文化センター付近

交通遭難者之碑　空知大橋の南側(空知町三丁目三)空知交通神社境内に建っている。道路の舗装化が進み自動車の増加につれて交通事故による死者が増えている。北海道は広域のせいもあってか交通事故死者数は常に全国で高い比率を占めているが、当滝川市も国道十二号、三十八号の大幹線が市内を通っており通過する車両もかなり多い。空知交通神社では、昭和三十八年から毎年慰霊祭を行っているが、昭和三十八年から四十五年まで九八名の死者がでたところから、これら犠牲者の霊をまつり、交通事故死絶滅を誓って昭和四十五年七月十七日にこの碑を建て、それ以来毎年この日に交通遭難者の慰霊祭を執行している。

交通功労者顕彰之碑　空知交通神社境内に、昭和六十年六月建立、七月十七日の同交通神社例祭に除幕式を行った。この碑は、交通安全運動に尽力し、全日本交通安全協会から交通栄誉緑十字章を受けた人名を刻み、その功績を末永く伝えていこうと、関係団体代表ら有志が建立実行委員会を組織して準備をすすめた。

交通功労者顕彰之碑



コスモス広場顕彰碑

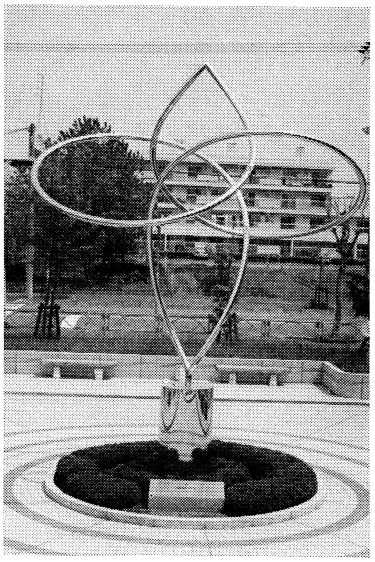
碑は、中国産御影石、左右にスウェーデン産黒御影石を配し、これに金賞の中島正雄・田中君太郎をはじめ銀賞八人、銅賞一〇〇人計一一〇名の名前を刻んだ。建立費用は二五〇万円である。

コスモス広場表彰碑（手づくり郷土賞）　滝川市の空知川河川敷に造成されているコスモス広場(二ヘクタール)が、平成二年七月五日に建設省主催の「手づくり郷土(ふるさと)賞」に選ばれ七月十日に札幌市において銅製の銘板が授与された。

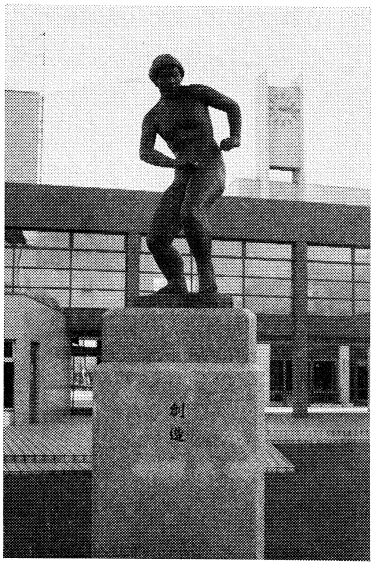
この賞は、個性的なまちづく

りに対して贈られるもので、今年度で五回目にあたる。平成二年度は、「坂道」「水」「街灯」「花と緑」の各テーマに全国各地から二一五件の応募があった。このうち滝川のコスモス広場は「花と緑の部」で選ばれたもので、道内では札幌・小樽など五市町が、それぞれの部門で受賞している。

コスモス広場は、昭和六十二年NHK朝の連続テレビ小説「チョッチャン」放映を機に、昭和六十三年一月には、ツツジとならんで市の花として追加制定されて以来、市民のボランティア活動を中心に栽培運営されるようになったものである。



モニュメント「はばたく」



合併記念像「創造」文化センター前

コスモスが満開となる八月下旬には、毎年「コスモスまつり」が開かれるようになり、これに農業夏まつりも共催されて市民の憩いと楽しみのイベントとして定着してきている。

市では、建設省から表彰された銅製の銘板を碑の中にはめ込んでコスモス広場入口に設置した。

モニュメント「はばたく」　新町二丁目中央児童館（もと、学習等供用施設）前に、昭和五十七年十一月に設置された。このモニュメントは道博会場前に飾られていたもので、高さ五・九メートル、幅四・八メートルで、直径九センチのパイプを曲げて造り、モーターで回転させると翼がはばたいているように見える。

制作者は国内トップクラスの造形美術家の伊藤隆通（札幌出身だが戦時中一時滝川に疎開したこともある）である。時価二、五〇〇万円のところ、道博事務局から一、〇〇〇万円で譲り受けたといういきさつがある。なお、この中央児童館の二・三階に滝川市こども科学館が建設中であり、平成三年四月開館予定となっている。

合併記念ブロンズ像「創造」

滝川市と江部乙町が昭和四十六年に合併して一〇年を経過した記念事業のひとつとして、文化センター広場に昭和五十六年十一月三日に建立、除幕されたものである。像の制作者は、小樽市在住の彫刻家鈴木吾郎である。なお、同じく合併記念として、江部乙の環境改善センター前には「姉妹像」も建立されている。

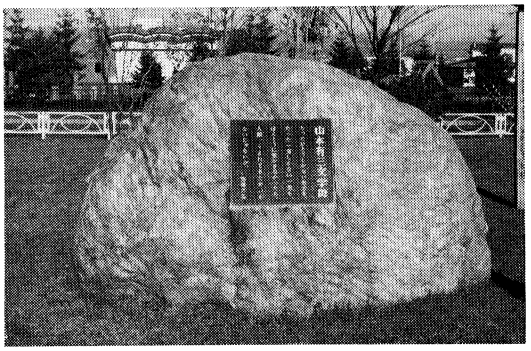
山本有三文学碑　昭和五十七年四月十五日國學院女子短期大学開学式の日に文化センター広場に建てられたものである。この短期大学設置には栃木学園が深く関わり、そして栃木市が全面的に協力を措しまなかった。この栃木学園が設立主体として認可を受けることになり、その関係で栃木市と滝川市が友好親善都市提携を締結する機縁となったのである。滝川市では、この締結を記念して栃木市が生んだ文豪山本有三の文学碑の復刻を計画、遺族らの了解を得て栃木市太平山公園にある文学碑と同じものを建立したものである。

斉藤　玄句碑　文化センターに続いている市立図書館東側の読書の広場に、昭和五十二年滝川文学協会が建立した。

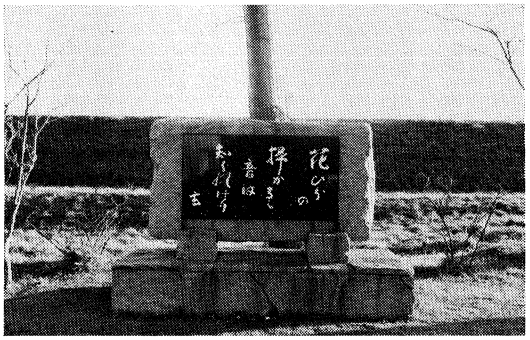
斉藤玄は、俳誌「壺」の主幹として道内俳壇で活躍していたが、昭和四十八年に芦別市から滝川市に転勤し、当時休刊中の「壺」を復刊し、滝川市俳壇の活性化に尽したが、昭和五十五年五月死亡。その前途を惜しまれた。碑には、彼の代表作「花びらの掃かる音は知られけり」の句が刻まれている。

高畑利宜遺稿記念碑　郷土館入口付近に、昭和三十三年に北海タイムス社が建てた碑がある。この碑は、もと旧市民会館前に建てられたのであるが、昭和五十一年九月滝川市郷土館が新築され、同館に高畑利宜の遺稿が保存されるようになったので、この記念碑も現在地に移しかえたものである。

彼の遺したぼう大な記録は、その嗣子高畑宜茂により整理保存されており、昭和三十一年に北海タイムス社が募集した「北海道文化財百選」に一位で入選した。この碑は、その表彰の碑である。



山本有三文学碑

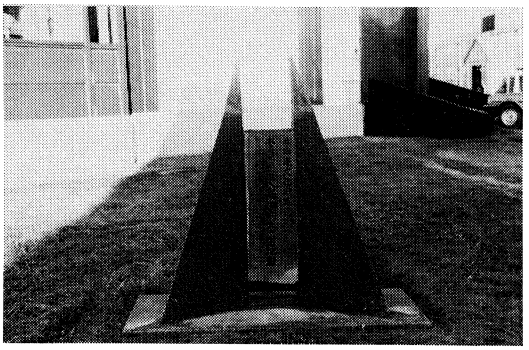


斉藤玄句碑

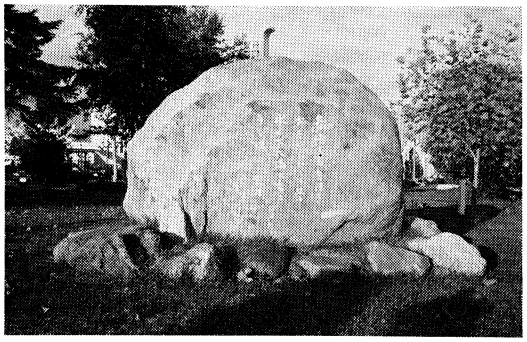
樋口賢治歌碑（新町三丁目文化センター前庭）

滝川出身でアララギ派の歌人として著名な故樋口賢治（昭和五十八年七四歳で没）の歌碑が文化センター前庭に建立され、平成二年六月二十三日に東京在住の未亡人原緒子はじめ遺族や、全国各地のアララギ派関係者及び地元関係者らが集まって除幕式が行われた。

碑は、日高産の自然石で正面には、昭和四十三年本道の野付岬で詠んだ「春待てるとほきおもひにひとり立つ氷の下に満ちくるうしほ」の短歌が刻まれている。これで同文化センター広場には、山本有三文学碑、郷土の俳人斉藤玄句碑、名護聖人程順則の六論の碑（平成二年十一月三日建立）と合わせて四基の文学



高畑利宜遺稿記念碑



樋口賢治歌碑

碑が建つこととなり、文化センターの名にふさわしい場所となっている。

故樋口賢治は、庁立滝川中学校卒業後上京し、昭和三年に斉藤茂吉に会いアララギ会員となり、同門の土屋文明に師事して歌作に励み、昭和四十二年からは選者として活躍した。

その代表作には「春の氷」、「鰊ぐもり」などの歌集があり、故郷の空知川を詠んだ歌も数多く残している。

歌碑の建立については、札幌・東京・福岡をはじめ各地のアララギ派関係者や、故人の旧友らが歌碑建立委員会(会長吉田正俊)を組織し、故人の業績を後世に伝えようと募金活動を展開した。これに、地元の滝川市文学懇話会(吉田えいじ会長)や、旧制滝川中学出身者で作られた一の坂同窓会(東京、高宮行男会長)らも、その趣旨に賛同し積極的に支援して建立されたものである。

名護聖人碑「六論(りくゆ)」(新町三丁目文化センター前庭)

市では、文化センターの前庭に名護聖人碑を建立し、平成二年十一月三日に除幕式を行った。高さ一・七メートルの夕張石で作られた碑の前面に御影石がはめ込まれ、「和睦郷里」など六つの聖諭(漢文)と、下にその和訳が刻まれている。裏面も同様に御影石がはめ込まれ建立の由来が記されている。

この碑は、滝川市開基一〇〇年に際して名護市と滝川市が友好親善都市盟約を結んだことを記念して建てられたもので、建碑費用は約一〇〇万円である。

名護聖人の六論建立の記

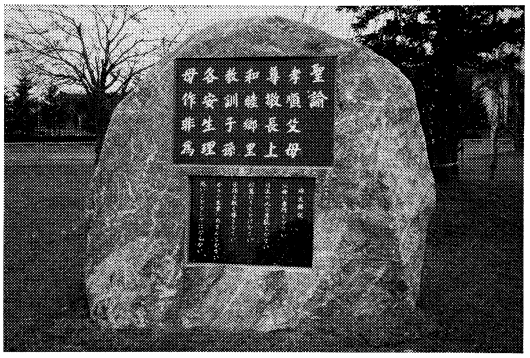
滝川市開基百年を記念して平成二年七月一日沖縄県名護市と友好親善都市の盟約を締結した。これは両市青年会議所が十七年にわたり児童交流を通じて親交を重ねたことに基いを置くことで喜びに堪えない。

この名護市において聖人とたたえられている程順則(ていじゅんそく)(一六六三年～一七三四年)は、近世の沖縄を代表する政治家・文学者として高名な人物である。青年期を中国に学び庶民の生活理念を説いた「六論衍義(りくゆえんぎ)」(中国で明末から清初に成立、皇帝の勅諭の「六論」を庶民に教えるための教科書)を持ち帰った。これが八代将軍吉宗の眼にとまり、その教えを庶民教育の基本として全国各地に広く普及したと伝えられている。程順則は、六十六歳の時、名護間切(旧名護町)の総地頭(現市長職)に任じられて以後、名護親方・名護聖人として名護市民に讃えられ、今もその教えは市民の心として生き続けている。この度両市の友好親善都市盟約を記念して、名護聖人の書と伝えられる教え「六論」を復刻建立した。この教えが市民の心となることを祈念して建立の記とする。

平成二年文化の日に　　滝川市

聖　諭

孝順父母　　父母に孝行しなさい



名護聖人碑「六諭（りくゆ）」

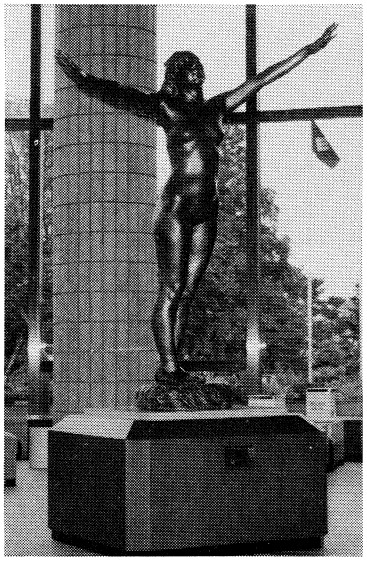
尊敬長上　目上の人を尊敬しなさい
和睦郷里　村里にうちとけなさい
教訓子孫　子孫を教え導きなさい
各安生理　各々の生業にあまんじない
母作非為　悪いことをしてはならない

ブロンズ像　翼（新町二丁目滝川市美術自然史館内）

平成二年六月十五日、美術自然史館内にブロンズ像「翼」（高さ一・八メートル）が設置され、その除幕式が行われた。

このブロンズ像は、日本近代彫刻の祖と呼ばれた故朝倉文夫（昭和三十九年八二歳で没）が六一歳の時制作した名作である。

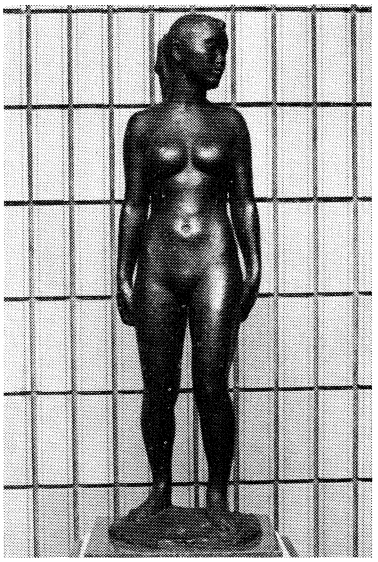
像は、若い女性が大空に向かって両手を広げているポーズで、グライダーの街と呼ばれ、開基百年を迎えて二世紀に希望をこめてはばたく滝川市のイメージを象徴するにもっともふさわしいものとして、滝川市が東京都台東区にある財団法人「台東区芸術歴史協会」に働きかけた結果贈られたという経緯がある。



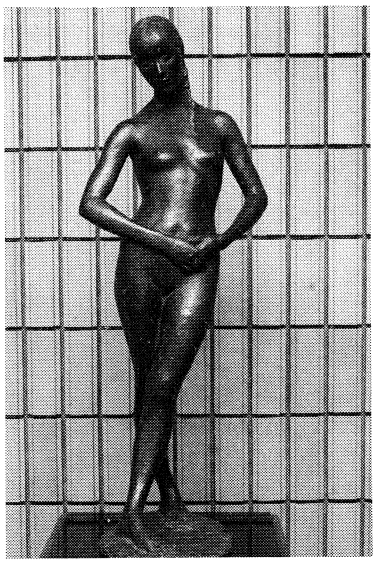
ブロンズ像「翼」

なお、この「翼」のブロンズ像は、今後市役所庁舎が改築になった際、新庁舎に移して多くの市民に親しんでもらうよう予定されている。

このほか、同美術自然史館には佐藤忠良作の「ポーズのリン」・

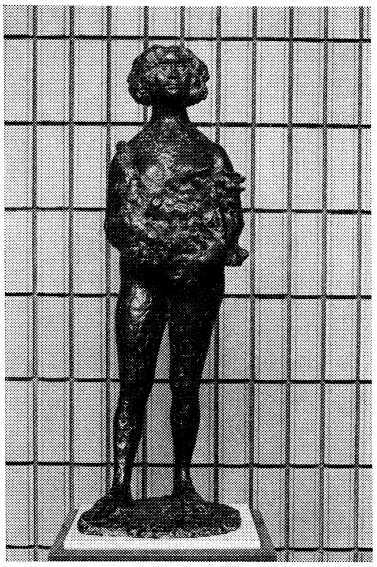


ポーズのリン　作 佐藤忠良

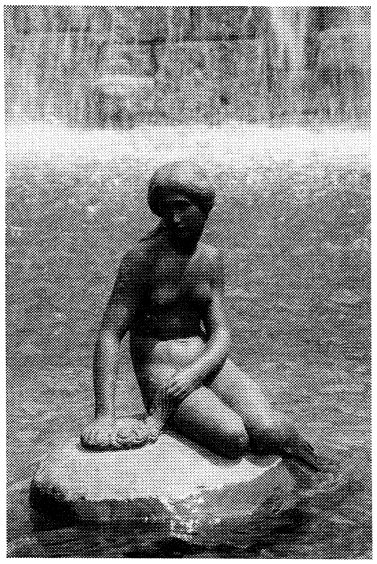


おさげの女　作 佐藤忠良

「おさげの女」と、本郷新の作品「鶏を抱く女」など著名な彫刻家の作品が陳列されており、このブロンズ像の展示により愛好家を喜ばせている。また、同館の前庭の池の中のブロンズ像「人魚の像」は、アンデルセン童話に出てくる架空の像で、デンマークにある実物の二分の一の大きさであり、その実物は名作として名高いものである。



鶏を抱く女　本郷　新



人魚の像

3　市役所付近

健康都市宣言碑（大町一丁目市役所庁舎裏）

市では、平成二年十一月三日市役所庁舎裏駐車場に健康都市宣言碑を建立、除幕式を行った。石碑は、高さ二・三メートル、幅一メートル、厚さ三〇センチ、台座三〇センチの白御影石で造られ、その前面には、平成元年四月一日健康都市宣言滝川市、滝川市名誉市民少覚史山書、裏面には宣言の前文が刻まれている。

この碑は、平成元年四月一日に滝川市が、心と体はもとより、社会的健康の実現を目指して「健康都市宣言」を行ったが、開基百年を記念して、市民にいっそう周知、アピールするために建立したものである。

なお、この健康都市宣言文は、本巻第五編、第一章行政の第十四節に記載しているので、本節では省略した。

健康都市宣言碑

平和公園碑（明神町一丁目）　昭和六十年八月十五日、滝川市では、終戦四十周年を記念して、記念式典及び多くの事業を企画した。この碑も、この事業に協賛した滝川市建設協会が記念として建立したものである。

この公園は、従来中央児童公園という名称であったが、記念事業として「平和の礎」のレリーフ、「少年」のブロンズ像が建立されたこともあって、これにちなんで平和公園という名称に変えた。

平和の礎と少年像（明神町一丁目公園内）　滝川市では終戦四〇年を記念して、大戦の犠牲となった三二〇万人余の霊を慰め、感謝の誠をささげるとともに、遺族の労苦をねぎらい、今後いっそう郷土滝川の発展を期して、不戦と平和の誓いを新たにするために、総額四、二〇〇万円余の資金で、式典及び数多くの事業を実施した。この平和の礎の大レリーフは、長岡凞山の作で左右に二〇羽ずつの平和の使徒「鳩」の彫刻と、少覺史山の書になる「平和の礎」の文字が刻まれており、北側の壁には、この事業に協賛した一二〇余団体及び個人二六〇余名の氏名が彫られている。また、レリーフの中央部分には、本道出身の彫刻家として著名な佐藤忠良の作になる「少年の像」のブロンズ像が建てられた。この少年像は、大戦の激戦地沖縄に建てられたものと同型のものを特に許可を得て複刻したという経緯がある。

なお、レリーフには吉岡市長が建立の由来を記している。

建立の記

昭和二十年八月十五日ポツダム宣言の無条件受諾によって第二次世界大戦にまで発展した太平洋戦争が終結してから四十年の歳月を経た　三百二十万人の犠牲と国土は破壊と焦土と化す悲惨な結末に我々は再び起こしてはならない戦争への反省と人間の尊厳を基本とする民主主義に徹して自由と平和を守り世界の国々との相互信頼と交易　協調融和の歩みこそ国家再建へのとるべき道と確信した

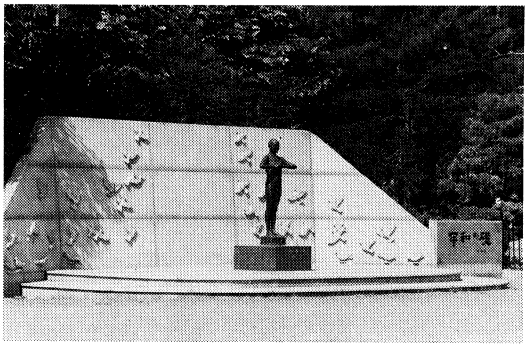
以来復興と繁栄への道程は長く　時に忍従と諦観の中に塗炭の苦しみと流汗の努力を続けた結果　今日では世界の脅威とも言われる経済大国として福祉に満ちた国家へと発展し　市政においても市民協調の中に幾多の変遷を経つつも中空知の中核都市としての地歩を確立している

我々はここに終戦四十年を迎えるに当り改めて犠牲となられた数多くの霊に感謝の誠をささげ御冥福を祈り御遺族の労をねぎらい今後一層郷土滝川の発展を期するとともに　この自由と平和で福祉充実の中に繁栄する我が国を共に愛し世界の国々と長く共存の歩みを続けるため市民有志の協力により少年の像を建立し「平和の礎」と命名して不戦と平和の誓いを固くした

ここに集う市民各位がこの意を体して努力されんことを切望し建立の辞とする

昭和六十年　終戦記念日

滝川市長　吉岡　清栄



平和の礎と少年の像

八十八周年記念塔（明神町一丁目総合福祉センター前）

この記念塔は、滝川ライオンズクラブが、滝川市開基八十八周年を祝って昭和五十三年四月二十五日に総合福祉センター敷地西南隅に建立し市に寄贈したものである。

この塔は、鋼板で作られ、形は北海道開拓一〇〇年記念塔に似せており、高さは八十八周年にちなんで八メートル八〇センチ、一辺

の幅八八センチの三面体という凝ったものである。

栃木市との友好親善都市盟約締結記念碑（市役所前庭）

市制施行以来の大きな課題の一つであった大学誘致問題は、國學院大學当局をはじめ、関係機関団体の積極的な支援と、市民全体の情熱と和によって昭和五十七年四月全市民歓喜の中に開学を迎え成功裡に終結をみた。この間の経緯については昭和五十九年十月に滝川市が発行した國學院女子短期大学開学記念誌「情熱と和の軌跡」に詳述されている。この経過の中で滝川市と栃木市とをつなぐ端緒となったのは、学校法人國學院大學栃木学園で、この学園は栃木市にあり滝川市の大学誘致運動が進むなかで、一時期設置母体を栃木学園としていたことがあった。この学園の顧問に栃木市長、理事に栃木市議会議長が就任しており、滝川市の理事者や議員が栃木市を訪問するにつれて友好関係が深まり、その後各種行事等に両市の交流がいっそう緊密になっていった。その後、両市議会において「友好親善都市盟約」を結ぶ議決がなされ両市にとって輝かしい歴史的第一歩を踏み出すことになったのである。

栃木市との親善都市盟約碑

昭和五十七年四月十五日に國學院女子短期大学の開学式が挙行されたが、この開学式に先立ち同日新築開館されたばかりの滝川市民会館において、栃木市からは永田市長をはじめ市議会、市民団体の代表者等一六名、滝川市からも市理事者、市議会議員、他関係者等約一〇〇名の出席のもとに、両市のますますの親善と発展を祈念して盟約式が行われ、両市長が署名したのであった。引続きこの盟約を記念して、栃木市が生んだ文豪山本有三の記念碑の除幕式と、栃木市の木「とちの木」の記念植樹が文化センター前庭で行われた。

市役所庁舎前にあるこの碑は、これを記念して同年八月に建立されたものである。（この項、滝川市制三十周年記念誌「市制と発展の軌跡」より引用した。）

名誉市民、市政功労者　神部俊郎胸像（市役所正門西側）

昭和六十三年七月一日、除幕式が行われた。胸像は、等身大のブロンズ製で約一メートルの台座に安置されている。制作者は東京の

神部俊郎胸像

山名常人である。今までに池田勇人元首相をはじめ三人の元首相胸像を制作するなど著名な彫刻家で、昭和六十一年には文部大臣賞も受賞している。胸像建立に際しては、神部俊郎先生顕彰事業委員会（委員長後呂義久）を組織し、市内有志から浄財を募金してこれにあてている。なお、この胸像建立とあわせて記念誌「町から市への歩み」（副題　神部俊郎先生顕彰誌、松重三郎編集）も発刊した。

なお、神部俊郎の経歴と功績などについては、本巻第五編行政の第一章行政第十七節名誉市民の項に詳述されているので、本節では省略する。

名護市との友好親善都市盟約締結記念碑（市役所前庭に建立）

栃木市との友好親善都市盟約締結記念碑と並んで建てられたこの碑は、平成二年七月一日の滝川市開基一〇〇年記念式典当日、式典に先立って市民会館において、滝川市と沖縄県名護市との友好親善都市盟約を締結した記念碑であり、平成二年十一月に建てられた。

両市の盟約締結に至る経緯は本巻第五編行政の国際・都市間親善交流の節にも記述されているので本節では概要のみ記した。

両市の交流は、昭和四十九年に両市の青年会議の事業として、まず滝川市の児童一二人が名護市を訪問したのを皮切りに、冬には名護市の児童が滝川市に、夏には滝川市の児童が名護市を相互に訪問する仕組みで、平成二年には一七回を数えるに至っている。

この間、児童だけでなく、双方の各界の市民、更に市同士の交流も活発となり、本年は滝川市が開基一〇〇年に当たり、また名護市も市制施行二十周年ということを記念して盟約締結へと発展してきたものである。

名護市との友好親善都市明約碑

盟約式には名護市から比嘉鉄也市長をはじめ同市議会、青年会議所らのメンバー四四人（この中には、名護市の「サクラの女王」や琉球舞踊団員などもおり、多彩な顔触れであった）が参列、また滝川市からも市長、議会議員、名誉市民、各界代表など約一〇〇人が参列した中で両市長が盟約書に調印、友好の握手を交わして終了した。

なお、盟約式は八月一日に名護市においても行われ、滝川市から吉岡市長はじめ関係者が参列している。

また、コスモス祭りには名護市の名産が即売され、滝川からも名護市の物産店に参加したり、両市の職員各一名を半年間交流研修に参加しあうなど具体的に親善交流事業を展開している。

更に、この記念碑とは別に名護聖人程順則の「六諭の碑」が文化センター前に建てられ、十一月三日の除幕式には名護市教育長らが参列している。

4　滝川神社境内

滝川神社境内には現在九つの碑が建てられている。

滝川屯田移住記念碑　滝川兵村に入植した四四〇名の屯田兵の氏名を遺し、その事蹟を永遠に讃え伝えるために、当時の町長渡辺祐次が発起委員長となって寄付を募り建立したもので、碑の正面には永山武四郎長男の武敏の書になる「滝川兵村開創記念碑」と刻まれ、左右と裏面には屯田兵の氏名が刻まれている。大正十四年五月に建立された。

忠魂碑　明治三十七、八年の日露戦争で戦没した滝川村出身者の慰霊の碑である。大正三年九月、時の町長奥井直吉が委員長、在郷軍人分会長の山崎庸哉が副委員長となって、在郷軍人滝川分会が中心となって建立した。題字は、日露戦争で滝川屯田兵の指揮官であった第七師団長大迫尚敏が書いている。この碑は、もとの二の坂練兵場（現滝の川公園）に建てられたが、大正十四年七月十三日に現在地に移されたものである。

顕彰塔　忠魂碑と並んで建てられたこの塔は、昭和三十年八月十五日に、滝川市遺族会（代表　吉田儀作）が中心となって建立したものである。昭和二十七年四月二十八日、我が国は平和条約に調印、批准交換を終えて漸く独立国としての地位を獲得した。これを契機として全国の遺族は一斉に遺族会を結成し、恩給支給や戦没者族扶助料の増加遺に向けての運動を展開した。

また、一方では大戦で散った戦没者の霊を慰めようと、忠魂碑にかわる顕彰塔建立の気運が高まってきた。滝川町においても、吉田儀作、福永清一、三谷登美などの遺族会役員が中心となって、昭和二十九年十一月十五日顕彰塔建設を決定し運動をすすめた。昭和三十年八月十五日の除幕式当日には、三二八柱の英霊を刻んだこの塔の前に、時の町長神部俊郎はじめ市民多数が参列し、戦没者を慰霊するとともに平和の誓いを新たにした。碑文は、当時の庁立滝川工業高等学校長宮田新一の撰による。

消防顕彰碑　昭和四十年四月一日、従来の滝川市連合消防後援会が発展的解散をしたあと、新たに滝川市消防協会が設立された。このために、消防顕彰碑建立発起人会が結成され、同協会の事業として、消防業務に尽した先人を末永く顕彰し、また現在消防業務にたずさわる人々を鼓舞激励するために顕彰碑を建立した。碑銘は元北海道知事町村金五の揮毫で、昭和四十一年九月二十六日に除幕式を行った。

市政功労者慰霊之碑　滝川市では市政の推進に大きく寄与した個人及び団体に対して表彰をするために滝川市表彰条例を制定、昭和四十七年四月一日に公布した。昭和五十七年七月一日に建立除幕式を迎えたこの慰霊碑は、この制度に該当する人だけでなく、滝川の初代戸長の更谷喜延はじめ歴代の首長、十二年以上在職した議員、叙勲及び褒章の受章者、市政功労者、江部乙町の名誉町民など、滝川の発展に特に功労のあった一一〇名の慰霊の碑である。

以後、該当者が出た場合追加し、毎年七月一日の開基記念日に慰

霊の行事を催している。建立者は滝川市、碑銘は市長吉岡清栄が書いている。

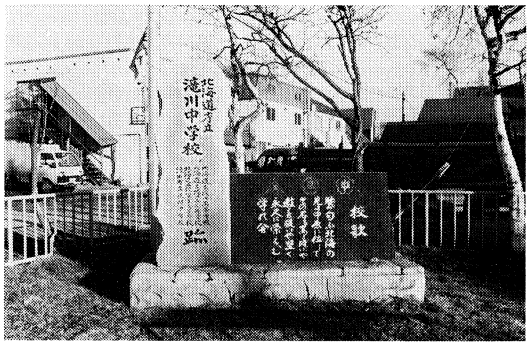
滝川神社創設記念碑　滝川神社の創設は屯田兵が移住した明治二十三年十一月、二の坂丘上に神霊揺拝所を建設したことからはじまる。その後、一の坂と明神通りに同型の社殿を造り二の坂神社の揺拝所が造営されたが、明治三十六年三社の合併問題が起こり、滝川神社を一の坂に奉遷し、他二社をこれに合祀することとなって、同年八月社殿造営、明治三十九年神社創立が許可された。

その後、明治四十年一部改築したが、大正十五年、再び新たに造営をした。この碑はこの完成を記念してこの年の九月に建立されたものである。通称は創設記念碑と言われているが、碑銘にあるように「滝川神社造営寄附者碑」であって、裏面には造営のための多額寄附者名が刻まれている。

滝川町御大礼記念貯金組合碑　昭和三年七月一日、元滝川町農業組合長樋口覚治が主唱者となり、今上天皇の即位大礼の祝典記念と家産造成、さらには滝川町の基本財産増殖の目的で貯金組合結成を呼びかけた。その内容は、四五円の金を二一二年間据置き貯金にすると、約一五〇万円という大金になる。このうち一部を町の基金に寄付しようというもので、二世、三世に引継いで達成するというユニークな内容である。この奇抜な趣旨に七五名の同志が賛同し、組合が結成された。詳細は市史下巻三二二ページ参照。この碑は、組合結成とこの趣旨を後世に遺すために、昭和三年十一月十日建立された。碑文は時の空知支庁長今井延太郎が撰した。

貯金報国碑　日中戦争が拡大するにつれて軍事費は激増の一途をたどり国民生活は日増しに苦しくなっていった。このため政府は、「欲しがりません勝つまでは。」のスローガンのもとに、国民に対して耐乏生活と勤倹貯蓄を積極的に求めた。こうした時代背景のもとに昭和十三年七月、貯蓄を通じて報国精神を強調するために、この碑を神社境内に建立した。碑文は、時の空知支庁長永山政能が撰している。

寄附之標　滝川神社宮司石丸幸雄が昭和十三年十月十日建立したものである。建立の趣旨は、元滝川市農業会長樋口覚治が大正六年に一町六反余の土地や、その後三回にわたり神社に寄付し、神社の発展に尽したことを後世に遺すために建立した。



庁立滝川中学校跡碑

5　一の坂付近

北海道庁立滝川中学校跡碑　一の坂西三丁目「仲よし公園」内に建てられている碑は、昭和五十九年一月二日に総工費二〇〇万円で、建立されたものである。

碑の前面には、建立者として、北海道立滝川高等学校　同滝川西高等学校、同滝川工業高

等学校、滝川町立夜間中学校の四校の校名が刻まれている。裏面には庁立滝川中学校として大正九年四月本道八番目の中学校として開校以来、戦後の学制改革により、校名が変わったこと、そして現在は工業高等学校となった経緯を簡潔に説明した碑文が刻まれている。開校以来七〇年の歴史と伝統を誇り、多くの人材を輩出した同校であるが、戦後の教育行政により、校名が転々として変わり同校同窓会「一の坂会」の運営にも微妙な影響を与えていたようだが、これを機に一枚岩として機運が盛り上ったという。

なお、この碑と並んで、滝中以来の校歌と三つの校章を刻んだ黒御影石の碑も併せて建てられている。

6　栄町・西町方面

「希望と躍進の群像」（滝川駅前）　観光都市を目ざす滝川市では街の顔とでも言うべき駅前広場の整備につとめているが、このブロンズ群像もその一環である。この群像は三体の乙女像で、それぞれ理想・青春・情熱を象徴し、三体合わせて「希望と躍進の群像」と総称される。昭和五十三年秋に、滝川市建設協会が建立し、現在は滝川市が管理している。制作者は、道内在住の著名な彫刻家鈴木吾郎である。そばの歓迎塔は同年、ライオンズクラブが建てたものである。

滝川地下道完成記念碑　栄町四丁目、JR鉄道線路の下をくぐる道々滝川・浜益線東側入口コンクリート壁にとりつけられている。建立者は、道々滝川・浜益線滝川町内道路改良工事促進期成会（関係五町参加　会長神部俊郎）である。昭和二十八年調査では、人・諸車を含めて一日の利用八、二八七件もあり、あかずの踏切りと言われたこの地下道工事は、昭和二十八年から始まり、一時土地の補償問題で中止、昭和三十三年三月完成した（市史下巻五八三～五八五ページ参照）。

人石記念塔　泉町二丁目泉公園内に建てられている。かつて、北海道人造石油株式会社滝川工場で使用された耐火煉瓦で、柵や土台を造り、その土台の上に高さ五メートルほどの細長い塔が建っているが、碑の名前も刻まれてなく、市内では珍しい記念碑である。

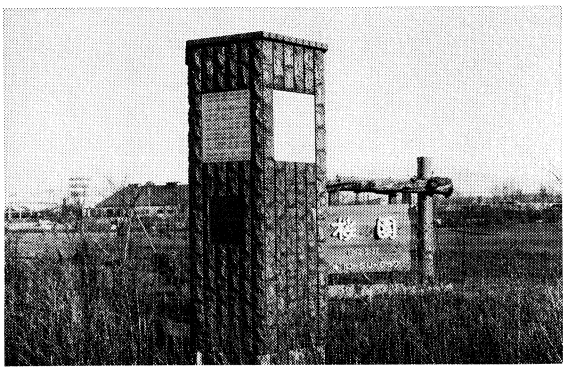
この塔の裏に建碑の由来が次のように書かれている。

渡辺四郎氏の功績を讃えて（註、設立当時常務、後に社長）本道多産の石炭を、血の一滴にも比べられた石油に作り変えることは臨戦下の国家要請であった。渡辺四郎氏はこの国策に応え、北海道人造石油株式会社を創立し、フィッシャー法による石油合成工場を当地に建設して操業と拡張工事を並行し終戦を迎えた。次いで一般石油化学工業へ転換を企図したが客観的情勢はこれを許さ

希望と躍進の群像（駅前広場）

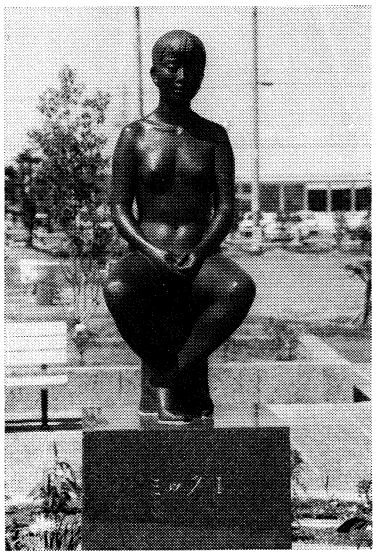
なかった。茲に関係者相寄りこの碑を建て、この地に高度の化学技術が華と咲いた当時を偲ぶよすがとする。

昭和三十七年七月　渡辺清　書、西田鉄雄作



桜の園の塔

桜の園の塔　昭和六十一年六月二十八日、有明町六丁目西公園内に建てられた高さ二メートルの六角柱のユニークな記念塔である。滝川ロータリークラブでは、市街環境の美化をはかるため新しく設営された西公園を桜の名所にすることを計画し、昭和五十七年から、市民の苗木提供を得ながら年次を逐って植樹した。昭和六十一年になって、途中枯れた分の補植二五〇本も含めて一、〇〇〇本の苗木移植を達成したため、八〇万円の費用で桜の寄贈者一、〇〇四名の名前を記入した記念塔を公園入口に建てたのである。あと、一〇年も経つと桜の名所として滝川観光に一役担うことになろう。



三世代交流パーク「ミロクI」

ブロンズ像「ミロクI（いち）」（西町二丁目三世代交流公園）

滝川商工会議所では、滝川市開基百年を祝ってブロンズ一体を市に寄贈し三世代交流公園内に設置して平成二年六月十五日にその除幕式が行われた。このブロンズは国画会会員秋山沙走武（函館市在住）の作品で「ミロクI（いち）」と命名された。

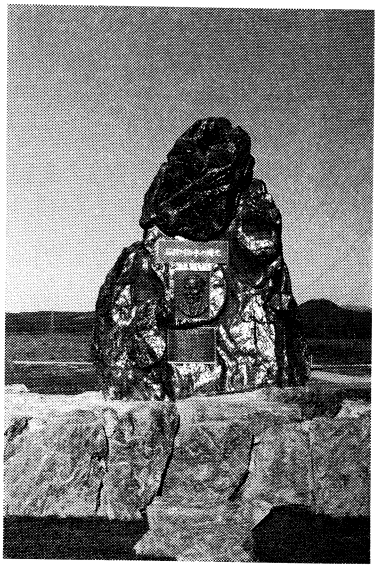
像は、腰かけた女性が手を結び足を交差させたポーズで、仏像として有名な弥勒菩薩（みろくぼさつ）をイメージしたものである。

制作者の希望により、誰でも自由に作品に手を触れることができるように、直径八メートルの外周から作品まで石畳が敷かれている。

岡崎文吉顕彰碑と記念モニュメント（西町池の前・川の科学館広場）

石狩川開発建設部では、平成二年九月二十八日に池の前排水機場落成と川の科学館オープンに際して、同じく記念事業として初代石狩川治水事務所長の岡崎文吉の顕彰碑と記念モニュメントの除幕式を行った。この碑とモニュメントについては、本巻第十一編第二章治水の第四節に記述したので、ここでは概要にとどめる。

岡崎文吉は札幌農学校卒業の道庁技師で、明治三十一年の本道大水害を機に「北海道治水調査会」が発足した際、石狩川の治水調査を命ぜられた。氏は一〇年間にわたって大変な苦労を重ねながら調



西町水上公園　岡崎文吉顕彰碑

査に従事し、その結果を明治四十二年に「石狩川治水計画調査報文」にまとめて報告した。この報文が現在の石狩川治水計画の基礎となり事業が推進されることになる。明治四十三年に石狩川治水事務所が設置され工事が始められたが、岡崎文吉はその初代事務所長として手腕を発揮した。氏は計画のみならず、技術面でも数々の開発をしており工学博士の学位も授与され、後には中国（満州）の遼河の治水工事の責任者となるなど国際的な技術者であった。

こうした治績により、石狩川治水事業八十周年を記念して顕彰碑が建立されたのである。また、モニュメントは、蛇行する石狩川と治水事業をデザインしたもので、碑と共に石狩川開発建設部が建立したものである。

学校法人今野学園顕彰之碑（西町六丁目滝川西高等学校前庭）

市では、西高等学校前庭に市立滝川西高等学校の歴史をしのぶ碑を建立し、平成二年、十一月三日文化の日に除幕式を行った。

高さ一・八メートルの御影石の前面上部に校章、その下に「学校法人今野学園顕彰之碑、裏面には建立経緯と役員氏名などが刻まれている。建碑費用の一部は同校同窓会が負担した。

同校は昭和三十四年、滝川商業高等学校として今野正義（今野商事会長）が創設した私立高校から出発したもので、昭和四十八年に市に移管されるまで、五、一三七人の卒業生を出している。今春、特別棟の竣工した時点で、滝商時代の校舎はすべて姿を消した。

建立経緯

滝川西高等学校は、昭和三十四年学校法人今野学園によって滝川商業高等学校として創立され、社会に有能な人材を輩出し、その果たした役割は誠に顕著なるものがあります。

昭和四十八年これを継承して十八年、校歌にこもる建学の精神を将来に亘り伝承することを誓い、併せて関係者の治績をたたえさらに校舎の全面改築完成と、滝川市開基一〇〇年を記念し滝川市西高等学校同窓会の協賛を得て顕彰の碑を建立する。

平成二年文化の日に　　滝川市

メモリアル歓迎塔（栄町四丁目三番道道滝川・浜益線沿い）

平成二年六月三十日（滝川市開基一〇〇年記念式典の前日）午後、メモリアル歓迎塔の除幕式が行われた。この塔は、グライダーの街滝川を象徴して空高く舞う翼をイメージしたもので、高さは約七メートルで上部には市の花コスモスをデザインしたピンクの時計を両面にとりつけたしょうしゃなもので、発展する滝川市のPRに一役買うこととなった。

滝川ライオンズクラブでは平成二年に創立三十周年を迎え、これを機会に滝川市に記念として何か贈ることを考えていたが、折しも

平成二年は滝川市開基一〇〇年の年に当たることから、これにふさわしいものとして記念塔を建立することにしたものである。結局、同クラブが三〇〇万円寄付、これに滝川市が一五〇万円負担してメモリアル歓迎塔が建立されたのである。

北電公園由来の記碑（泉町北電公園入口　階段の西側）

北電公園入口に「北電公園由来の記」の碑を建立し、平成二年十二月二十一日関係者列席のもとに、その除幕式を行った。

碑は、高さ一・九五メートル、横一・九メートルの日高産自然石（下の部分は若干地中に埋めている）の前面に、たて・横九〇センチの黒御影石板に白文字で「北電公園由来の記」が全文刻みこまれている。

建碑の由来は、後記の「由来の記」に詳述されているが、概要は昭和四十八年に滝川市がこの土地を北海道電力株式会社から借り受けて、「北電公園」として造成していたところ、滝川市開基一〇〇年記念に際して、同社から好意の無償譲渡の申出があり、同日両者による無償譲渡にかかる贈呈式が行われた後、除幕式がとり行われた。

北電公園由来の記

戦後、産業の復興と国民生活の安定を確保する上で、強く望まれた電力開発のため、昭和三十年北海道電力株式会社は、空知炭田の豊富な石炭による火力発電所建設を、戦時中軍需産業として役割を果たした人造石油工場跡地であるこの地に決定された。

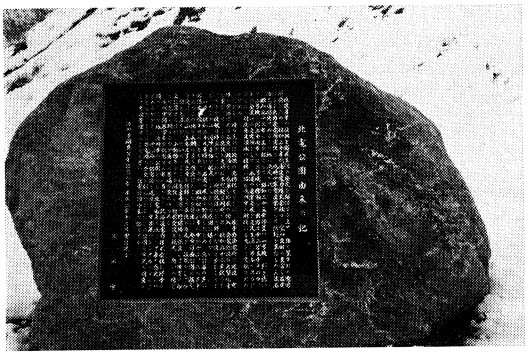
昭和三十三年に工を起こして、昭和三十五年待望の一号機、引き続いて二号機、同三十七年には三号機が稼動し、出力二十二万五千キロワットの全道一の発電所として、本道の産業発展と道民生活に寄与されるとともに、財政再建団体の桎梏に悩む滝川市の財政にも大きく貢献されたのである。

しかし、時の流れは施設の老朽化とともに、原子力発電所の建設、有限の資源である石炭の枯渇と、低廉な外炭の輸入・発電施設の大型化等と重なって、この施設の更新は不可能と判断され、昭和六十三年秋をもってその機能は停止となったが、研修施設として新たな道を歩むこととなったことは、関係各位の配慮によるものと感謝に堪えない。

一方、昭和三十九年頃から石炭の残灰を野積したため、灰公害の声が関係者を悩ませることもあったが、昭和四十八年に市が十二・六ヘクタールのこの地を長期に亘り借受けたことを背景に、都市公園の指定を受け、灰山に土木工事残土等を堆積して草地の造成と、植栽をして今、緑も色濃くなっている。ここに児童専用と野球場を設置して体育の向上に資するほか、小動物ランドを開設し、動物愛護と観光、憩いの場として充実を期するなど着々と整備を進めつつある。

滝川市開基百年を記念する年に当たり、北海道電力株式会社の好意を得て、この地を滝川市の公園となし、北電由来の地として永く歴史にとどめるとともに、中心部に記念塔を建設し、市発展のシンボルとすることとした。ここに発電所の歴史を刻むとともにこの公園を市民の財産として有効管理することを誓い、北電公園由来の記とする。

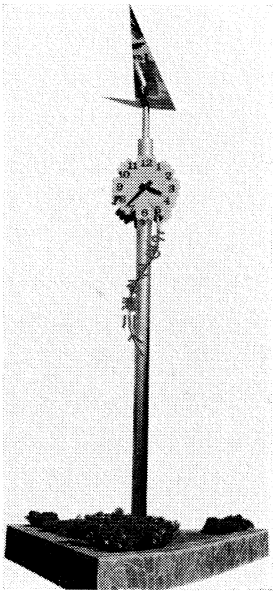
滝川市開基百年記念の年
平成二年十二月吉日建立
滝川市



北電公園由来の記碑

7　文京町・市民会館附近

現市民会館は、昭和五十七年に建設開館となったが、この敷地に



メモリアル歓迎塔

叙勲褒章受賞者
名誉市民市政功労者之顕彰碑

三浦華園から寄贈を受け移築された華月館が、滝川市文化財第三号として昭和五十五年に指定を受けている。その後、この敷地内には各種の碑や像が建てられ、滝川市の主要な観光場所となってきた。

叙勲・褒章受章者　名誉市民・市政功労者之顕彰碑

市民会館の北隣りに、昭和五十七年七月一日建立されたもので、高さ四・五メートル、土台の幅八メートルの黒と白の御影石で造られた見事な碑の正面には、三人の名誉市民をはじめ生存、物故者を合わせて叙勲・褒章の受章者、市政功労者ら一二〇人（いずれも五十七年当時の人数で、毎年該当者があり次第その都度碑に刻まれている）の名前が彫られている。

建碑の経緯は、昭和五十六年に江部乙町との合併十周年の記念事業が開催された際「第二次大戦後、国の再建に寄与して叙勲および褒章の栄に輝いた人々と、市勢の発展に多大な功労のあった名誉市民や市政功労者の治績を長く後世に伝えたい」という機運が市民有志の中から高まり、募金運動の結果、この顕彰碑と、滝川神社に建てられた市政功労者慰霊碑の二つが、約一、二〇〇万円で建てられたものである。

華月館紹介碑　滝川市文化財として指定された華月館入口に巨大な岩石が安置され、この前面に華月館の由来についての説明を書いた版がとりつけられている。この碑は、ホテル三浦華園旧館を移転修復した昭和五十七年に建てられたものである。

市政盤石の礎（佐久間貞江顕彰碑）　昭和五十九年十月十三日滝川市民会館前に建立、除幕式が行われた。高さ約二メートル、幅約三メートルの夕張産自然石に、佐久間貞江の胸像レリーフと、「市政盤石の礎」の文字を刻んだ銅版がはめ込まれている碑である。

市政盤石の礎

この碑建立とあわせて、佐久間貞江の功績を讃え偲ぶ記念誌も発刊された。

佐久間貞江は福島県の出身で昭和二十二年に滝川第一小学校長から道議会議員に初当選し、

佐久間貞江前市長

以来三期一二年間にわたり戦後の道政に寄与した。三十四年滝川市長に当選、三期一二年間市政を担当し、この間、財政再建団体の指定を受け緊迫していた市財政を立て直し、市庁舎の新築や学校などの施設の整備充実、中空知広域圏の策定や江部乙町との対等合併を成功させるなど数多くの功績を遺した。

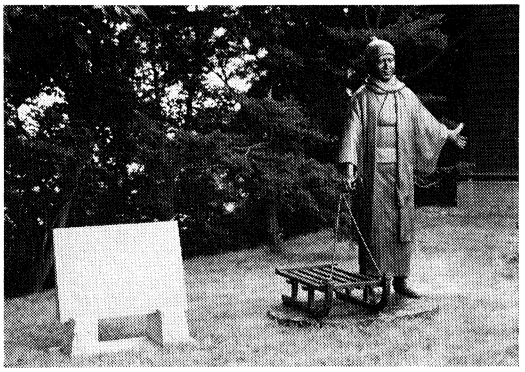
こうした自治功労により、昭和四十二年秋の叙勲で勲五等双光旭日章の受章をはじめ、滝川市政功労章第一号の栄誉を受けている。

市長勇退後の翌四十七年四月十八日に七七歳で死去。死亡叙勲として勲四等瑞宝章受章、従五位を授けられた。

昭和五十九年、前市長の十三回忌に際し、吉岡市長はじめ、佐久間貞江とともに市政に関与した有志が、佐久間先生顕彰事業実行委員会を結成し、元市議会議長田中君太郎が委員長となって事業を展開、約四八〇万円の資金を拠出し、碑の建立と、記念誌出版の事業を達成したのである。

チョッちゃん記念像　昭和六十二年四月から九月末まで、毎朝放映されたNHKテレビ小説の原作者黒柳朝の記念像である。NHKでは、六十二年一月に市内一の坂を中心として冬のシーン、七月にはラストシーンを丸加山でロケを実施したが、このロケーションには小学生も含めた多くの市民がエキストラとして参加するなど、滝川市はチョッちゃんブームに湧いた。

このテレビ小説が放映されるや、活躍舞台が北海道という地域性や、内容もまた多くの困難を乗り越えて逞しく生きていく人という、人間の生き方に多くの示唆を与えるということで一躍茶の間の人気番組となり、チョッちゃんのふるさと滝川の名前は全国に広まった。


チョッちゃん記念碑像

また、テレビの人気にあやかり、チョッちゃんの名前をつけた菓子、ワインをはじめ多くの商品が続々と誕生し、観光宣伝の強化とあわせてチョッちゃんのまち滝川のイメージアップに拍車をかけた。

一方、黒柳朝がコスモスの花を愛好していることから、市内全域にコスモスを植えてコスモスの街にしようという運動が広まった。

このため、昭和六十三年一月に、従来の市花ツツジに加えて、このコスモスが市花に制定され、八月二十六日には国内でコスモスをまちの花とする市町村のコスモスサミットの開催、ついで二十八日には空知川河川敷でコスモス祭りがおこなわれるなど、テレビ小説「チョッちゃん」のもたらした影響は強烈なものがある。

原作者の黒柳朝は、明治四十一年から三八年間市内一の坂で開業医をしていた門山周通の長女であり、また彼女の長女の黒柳徹子は司会・著述で全国的に有名である。このテレビ小説を機縁として、

黒柳朝はたびたび来滝して講演するなど多くの市民に親しまれているが、六十三年八月には今まで蒐集した西洋古美術コレクションを故郷の滝川市に全部寄贈している。

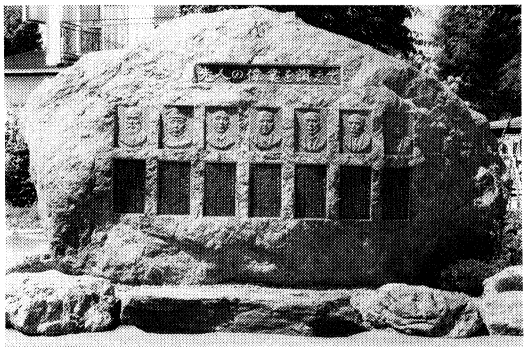
滝川市では、テレビ放映により滝川市の名前を全国に広めたことと、チョッちゃんの生き方が現代の世相に一石を投じ、大きな示唆を与え、新しいまちづくりと観光行政の推進に大きく貢献したことを讃え、黒柳朝を昭和六十二年十一月に市政功労者に選んだ。

ブロンズ像制作者は小樽の彫刻家鈴木吾郎で、大正十年ごろの服装でそりをひいている少女時代のチョッちゃん等身大像である。

除幕式は昭和六十二年七月十八日で、黒柳朝も参列した。

顕彰レリーフ（文京町一丁目　市民会館前庭）

滝川市開基一〇〇年記念事業の一つとして、日高産の巨石（高さ約三・七メートル、幅約四・二メートル）に、開拓以来の功績者七人の肖像、並びにそれぞれの功績を銅板に刻んだレリーフをはめ込んだ記念碑が市民会館前庭に建立され、平成二年七月一日式典に先立ってその除幕式が行われた。



「先人の偉業を讃えて」　顕彰レリーフ　市民会館

これら七人の先人は、滝川の開拓以来各時代において滝川の発展のため献身的に活動し、目的達成の中心的役割りを果たした先達者であり、市では開基一〇〇年の記念すべき年に当たり、その功績を讃え、治績を後世に伝えるために建立したものである。

顕彰者の選定に当たって、開基一〇〇年記念事業企画推進会議では顕彰委員会を組織して、数多くの会合を重ね慎重協議のうえ市長に答申し、更に市議会に諮って決定されたものである。

被顕彰者の事績　〈碑文から〉

讃　仰

滝川市は、明治二十三年一月十五日の開村以来幾多の辛酸を経て開基一〇〇年の記念すべき年を迎えた。

開基以来一〇〇年の風雪を凌ぎ、数々の試練と障害を克服し今日の繁栄を構築した過程には、朔北の地に挑み、開拓と地域発展に身を挺した先人たちの情熱と汗、そして英知と和の軌跡があることに思いをいたし、市民ひとしくその労苦に対して畏敬と感謝の念を捧げなければならない。

滝川市一〇〇年の歴史を回顧するとき、これら多くの先人の偉業と共に、各時代における地域発展の願望を結集し、卓越した識見と力量をもって先導的な役割りを果たした先覚者の功績は顕著である。

開基一〇〇年記念事業実施にあたり、市民各層代表で構成された一〇〇人委員会では各種事業の企画を進めるなかで、百年の歩みのうち特に滝川発展に結びついた事蹟を挙げ、その中核的役割りを果たした指導者七名を選んだ。市では、この趣旨を体して市議会に諮り、特別に顕彰することとした。

滝川発展に貢献したこれら先達の偉業を讃え、この治績を永く後世に伝えるためここに顕彰の碑を建立するものとする。

平成二年七月一日　開基記念日に

滝川市長　吉　岡　清　栄

高畑利宜

高畑利宜殿
天保十二年十二月二十七日生
京都府出身
大正十一年　五月　十四日没
（八〇歳）

明治五年六月開拓使一等附属として空知・上川など石狩川流域を調査し、本道内陸開発に偉大な足跡を残した。更に同十九年五月、市来知（三笠）から忠別太（旭川）までの上川仮道路開削にあたり北海道庁属として工事の責任者となり短期間で完成させ、その後の改修工事も担当した。この間、工事事務所を空知太（滝川）に設置したことにより滝川開拓の基盤が確立された。

特に、道庁属退官後の明治二十一年十月、滝川に居を定め駅逓及び郵便局を開設して移住民の便宜を図ったことにより、市街地形成をもたらし、この地方の中心的位置を占めるに至るなど、滝川の発展に大きく貢献した。

大竹康造

大竹康造殿
嘉永六年　一月　二日生
新潟県出身
明治四十四年十二月十二日没
（五八歳）

明治二十三年七月、滝川屯田軍医として来村、同三十年三月退官後は本村で医院開業し地域医療のために尽力された。明治四十二年五月には村会議員、七月には村長、翌四十三年十一月、町制施行により初代町長に就任するなど、開村以来多くの要職を歴任し町勢伸展に尽力した。特に、明治四十年から行われた鉄道下富良野線（現根室本線）の分岐点の位置決定に際しては、三年余にわたり空知川沿岸鉄道期成会長として奔走し、ついに滝川分岐の決定をみた。

大正二年十月に同鉄道の開通により滝川が道内における交通の要衝として、飛躍的発展に大きく貢献した。

江藤恭太郎

江藤恭太郎殿
安政二年十月二十八日生
大分県出身
昭和九年六月　十九日没
（七八歳）

明治二十三年五月、石狩川汽船会社支配人として来村、明治二十五・二十六年には、滝川村総代人、同二十七年十二月から大正八年までの二五年間滝川郵便局長、明治四十一年五月、同四十五年六月には村・町議会議員をつとめるなど、開村初期から民生の安定と産業の振興を図り滝川の発展に尽力した。

特に、明治四十年から行われた鉄道下富良野線（現根室本線）の鉄道分岐点問題に際して、空知川沿岸鉄道期成会副会長として東奔西走し、ついに滝川分岐の決定をみた。大正二年十月、下富良野線開通により道内における交通の拠点として滝川の産業経済の発展に大きく貢献した。

五十嵐太郎吉

五十嵐太郎吉殿

明治十二年二月　一日生
福井県出身
昭和十二年六月十三日没
（五八歳）

明治三十一年五月、来村して雑貨商を経営し、同四十二年村会議員、大正三年九月には道会議員として活躍した。明治四十四年滝川実業団を結成、団長に就任。大正十五年滝川商工会、昭和二年北海道商工連合会を結成、会頭に推されたほか、各種企業を興すなど商工・経済の振興に活躍した。

特に、開村以来の念願であった空知川築堤については、大正十二年機会をとらえて奔走した結果、国内でも数少ない市街地輪中堤防として翌十三年十一月に完成した。以来水害に対する住民の不安が解消されるとともに、産業経済は著しく安定・進展し滝川の発展に大きく貢献した。

三澤貫之助

三澤貫之助殿

明治五年　四月十四日生
島根県出身
昭和三十二年六月　一日没
（八五歳）

明治二十七年五月、江部乙屯田兵として来村、明治三十九年二月、最初の滝川村会議員、江部乙分村により同四十二年四月から三期江部乙村会議員として活躍した。大正三年十一月及び同十二年と二度にわたり村長に就任した。その他、空知土功組合長、江部乙産業組合長、果樹組合長、農会長などの重職を歴任し、江部乙の産業振興発展に尽力した。

特に、大正五年、屯田兵扶助料追給問題に活躍して実現、更に大正十二年二月、屯田兵恩給法適用のため道内屯田関係者の先頭に立って奔走し、ついに受給実現をみたことは、民生の安定向上が図られ、滝川の発展に大きく貢献した。

神部為蔵

神部為蔵殿

元治元年　二月　十一日生
神奈川県出身
昭和二十二年一月三十一日没
（八二歳）

明治三十八年四月、北海道庁土木技手として空知大橋架橋工事監督のため来村、翌三十九年十二月、空知大橋の竣工後退官して土木請負業を開業した。同四十五年六月町会議員、大正九年八月道会議員、同十三年五月・昭和三年二月・同五年二月と引続き衆議院議員として地域の発展に貢献するとともに、昭和十年五月から八年間にわたり滝川町長として戦時下の行政及び産業振興に尽力した。

特に、国策として計画された人造石油の工場誘致を積極的にすすめ、昭和十六年六月、東洋一を誇る北海道人造石油株式会社滝川工場が完成し、関連産業の立地とあわせて滝川の飛躍的な発展に大きく貢献した。

大崎栄吉

大崎栄吉殿

明治十三年　三月三日生
富山県出身
昭和四十八年二月四日没
（九二歳）

明治二十七年五月江部乙屯田兵家族として来村、大正七年六月及び同十三年と二期村会議員、昭和三年十二月及び同八年七月と再度にわたり村長に就任した。その後空知土功組合長、産業組合長、農業委員会長、森林組合長など多年にわたり要職を歴任し村勢の伸展に尽くした。

特に、開村以来の懸案であった江部乙地区を石狩川氾濫による水害から防止するため、昭和八年に石狩川沿岸道路設置期成会を設立し、その会長に就任するとともに、以来、幾多の困難を克服して事業を推進し、昭和十一年九月ついに石狩川沿岸道路として完成させたことにより、民生の安定と産業発展に大きく貢献した。

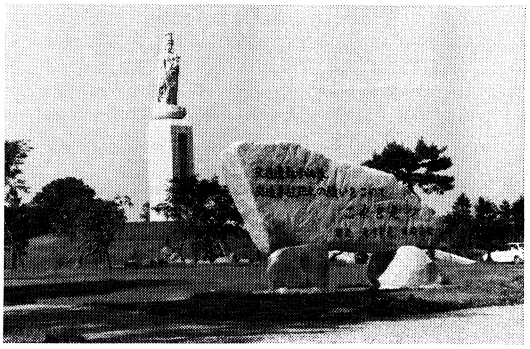
北海道交通遭難者慰霊・交通安全祈願聖観音菩薩像

昭和六十三年十月二十六日開眼・慰霊祈願式が行われたこの像は、通称「交通安全祈願像」と呼ばれ、大仏師長岡淵山（本名孝明、昭和六十三年度市政功労奨励者・滝川市在住）の作である。

この石仏像は、淵山が二年前から彫り続けていたもので、長さ八・一八メートル、重さ八〇トンの御影石の原石から高さ七・八五メートル、三八トンに削られて聖観音像に変身したものである。

仏像製作の話を聞いた吉岡市長や道内の交通安全関係者が、昭和六十二年十二月に「聖観音像建立期成会」（中島正雄会長・滝川交通安全協会長）を組織して、その建立資金造成に当たった。

建立場所は南滝の川六三（國學院女子短期大学の東側）の丘の上で、直径七〇メートル、高さ五メートルの盛り土の上に、高さ一〇・七五メートルのコンクリート土台を乗せ、その上に約一・四メートルのハスの台座を置き観音像を安置した。観音像の高さは地面から約二〇メートルに達し、慈愛あふれるやさしい顔で開通したばかりの道央自動車道を見守るように南を向いている。



交通安全祈願聖観音菩薩像

建立費用は工費と開眼・供養式を合わせて約八、六五〇万円である。

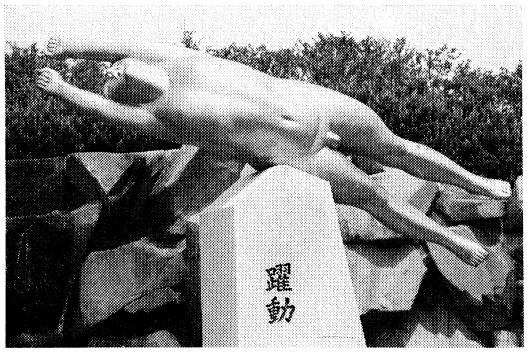
開眼・慰霊祈願式は十月二十六日午前十時から交通安全関係者や交通事故犠牲者の家族など約三〇〇人が集まって厳しゅくにとり行われた。なお、北海道交通事故犠牲者遺族の会長には前北海道知事の堂垣内尚弘がなっている。

長岡淵山は、道内でただ一人、石仏作りの師匠格の大仏師の称号をもち、修業時代を含めて大小三百体の石仏像を作っており、昭和六十年八月、平和公園に設置された「平和の礎・鳩レリーフ」も同

人の作である。なお、今回の石仏像は一本の原石から作られた仏像としては日本一のもので、凞山の代表作品でもある。

8　滝の川公園

皇太子殿下御慶事記念事業碑　滝川第二小学校校門近くにあるこの碑は、通称大礼記念碑と呼ばれ、大正十三年六月十八日に建立されている。同校関係者は、大正十三年一月十六日の摂政殿下（昭和天皇）御成婚を祝い、この記念事業として同校グランドの造成を計画、校下各団体の協力を得て完成、その記念としてこの碑を建立したものである。碑の裏面に同校同窓会、同保護者会、滝の川青年団、同処女会の名前が刻まれている。



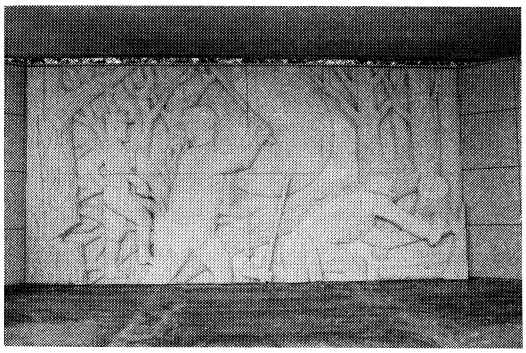
躍動の像

躍動の像　昭和五十七年十月十日（体育の日）、滝の川運動公園に滝川市が建立したブロンズ像である。岩石で構築した小さな築山に懸かる小滝をバックに筋肉隆々としたスポーツをする青年像は運動公園の象徴とも言えよう。制作者は東京芸術大学美術部助教授（当時）荒川明照（国画会員）である。

この滝の川公園一帯は、もと滝川屯田兵の練兵場の一部であったが、屯田兵制度廃止後灌漑溝で二分されたあと放置されたままで、開拓当時そのままの巨木が生い茂るにまかせていた。昭和三十四年に市長となった佐久間貞江は、由緒あるこの地を公園として後世に残そうと昭和三十六年から年次計画をたてて造成に取り組んだ。

この事業は次の吉岡市長に引継がれ、この結果野球場をはじめ、陸上競技場、プール、庭球場などの各種戸外体育施設や、青年体育センター、スポーツセンターなどの屋内体育施設も年々整備され、道内屈指の総合的な運動公園が造成された。この「躍動の像」は、運動公園完成を記念して建てられたものである。

なお、この公園の名称決定に当り、市議会で再度審議した経緯もあり、市制三十周年記念誌にそのてんまつが詳述されている。



屯田開拓レリーフ（滝の川公園）

屯田開拓レリーフ（二の坂町　滝の川運動公園）

滝川市開基一〇〇年記念事業の一つとして、スポーツセンター裏の野外ステージの壁にとりつけられたもので、平成二年七月一日記念式典に先立って除幕式が行われた。

制作者は、一つの石で造られた仏像では日本一の大きさを誇る「交通安全祈願聖観音菩薩像

（國學院女子短期大学の東側に建立）」を作った滝川市在住の大仏師長岡淵山である（淵山はこの他に、平和公園のレリーフを始め滝川市で多くの作品を制作している。）

この、石の彫刻レリーフは、屯田兵が原生林を切り拓くさまをモチーフとして横六メートルの御影石を刻んだ大作である。

もと、この公園一帯は、明治二十三年に入植した滝川屯田兵の練兵場跡であり、由緒あるレリーフと言えよう。

なお、今回作られたレリーフの以前の壁には、同様の趣旨でモザイク模様の壁画が張られていたが、損傷が著しいために取替えたものである。このレリーフの碑文は次のとおりである。

△碑文▽

練兵場跡に想う

この地は、その昔、滝川屯田兵練兵場の跡地である。明治二三年四四〇名の屯田兵と、その家族も含めて一九三一名の人びとが、この地一帯の開拓に従事するとともに、北門警備の重要な使命のもと、この練兵場できびしい軍事訓練に励んだのである。

遠く故郷を離れて滝川に移住した屯田兵たちが、はげしい演習の合間に語りあったのは、それぞれの古里の山河や、なつかしい人々との思い出話であったろう。時には故郷の唄の交歓もあったかも知れない。茫々一〇〇年の歳月を経て、練兵場あとは、御手洗川の清流に往時の面影を偲ぶはかりとなり、今は近代的施設が整備され、スポーツや憩いの場として広く市民に親しまれ、利用されている平和な運動公園に変ぼうしている。

滝川開基一〇〇年の記念すべき年に際し、屯田開拓レリーフを制作して、滝川発展の基礎を築いた先人の労苦に感謝し、その治績を後世に永く伝えることを祈念するものである。

平成二年七月一日　開拓記念日に

滝川市長　吉岡清栄

ひょうたん池記念碑（二の坂町滝の川公園内）

滝の川公園西口（国道十二号沿い）と公園のプールとの間に、周囲一〇〇メートルほどの小さな池がある。その形をひょうたんに似せて造ったところから「ひょうたん池」と呼ばれている。

この池は、陸上自衛隊滝川駐とん地隊員の一部が、昭和三十七年七月に函館に移駐するに当たり、これらの隊員の手作業による奉仕活動で造られたもので、造成以来ずっと市民に親しまれている。

この池の東端に自然石を使った碑が置かれている。この石は、周囲約三メートル、高さ六〇センチほどの小型なもので、その中央に白御影石に彫られた池の由来の碑文がはめこまれている。

平成二年六月十日、滝川駐とん部隊設立三十五周年と、滝川市開基一〇〇年を記念して、滝川自衛隊協力会（会長は吉岡市長）と、滝川駐とん地司令が建立したものである。

ひょうたん池記念碑

碑文　池の由来

昭和三十七年七月陸上自衛隊滝川駐屯地において函館移駐の第二十八普通科連隊が編成された。「滝川を離れるに当り我々が誕生したあかしを」と屯田兵ゆかりのこの地に隊員自らが三日間延六百人手作業で池を掘りあげ勇躍函館へ向った。ひょうたん池と市民に親しまれ、その後数度にわたり浚池され現在の形になった。

陸上自衛隊滝川駐屯地創立三十五周年に当り

平成二年六月十日之を建つ

滝川自衛隊協力会
陸上自衛隊滝川駐屯地司令

石黒白萩句碑　滝の川公園西側入り口付近に、昭和五十三年十月八日に建てられた。白萩は、戦前、戦後を通じて滝川の文学活動発展のために尽くし、特に俳句の分野では、昭和十二年ごろ中央俳壇に発生した新興俳句運動の北海道における推進者として知られ、「葦芽」「アカシヤ」の幹部として活躍し、更に氷源帯同人として息の長い作句活動を続け句集「朱塗りの箸」など発刊している。

また、短歌でも昭和十年には滝川歌人会を結成、戦後も石川啄木の歌碑建立につとめるなど幅広い活動をしていることを記念して、滝川文学会同人がこの碑を建立した。碑の句や銘は、少覺史山（納）が書いている。

9　滝の川斎苑

滝川市物故職員慰霊之碑　滝の川斎苑入口東側に、昭和五十五年九月二十三日滝川市が建立、碑銘は少覺史山が書いている。

この碑には、「滝川市開基九十周年を記念し、歴代首長はじめ職員が滝川発展のために寧日ない任務に挺身された苦闘の足跡を忘れてはならない云々」と滝川市長吉岡清栄の碑文が刻まれている。

屯田開拓者の碑　昭和五十四年十一月、屯田兵及び開拓に従事し現在の滝川の繁栄をもたらした人びとを慰霊するために滝川市が建立したものである。滝の川斎苑の無縁物故者の碑と同じ場所に建てられている。

無縁物故者之碑　不幸にして滝川市内で死亡し、その身寄りの不明な人や、墓は建っているが親類縁者もこの地を去り、供養する人もなくなっている気の毒な物故者を慰霊するために、昭和五十三年七月一日滝川市が滝の川斎苑入口東側に建立した。

水子観音像　この像は、昭和四十七年十二月一日建立され、大町一丁目光暁寺境内に祀られていたが、管理上の問題もあって、昭和六十三年七月に滝の川斎苑地内に移された。

建立に際しては、北海道滝川保健所運営協議会が中心となって、滝川市水子観音建立協賛会を設立し、市医師会、助産婦会、社会福祉協議会他、二、三の団体が協賛している。観音像は祠の中に安置されており、そこに観音像建立の趣旨が書かれている。それによると、胎内で病気、産後、早産、優生保護法による母体保護、経済的な家庭事情等による人口妊娠中絶等で死亡した不幸な赤ん坊供養のために建立した（詳細は略）とある。祠は、斎苑入口の向い側に建っている。

10　江部乙神社境内

江部乙神社境内に五つの記念碑がある。

開村記念碑　昭和三年十一月、江部乙開基三十五周年記念事業の一環として、江部乙屯田兵四〇〇戸が明治二十七年に移住したことを記念して建立したものである。

日露戦役記念碑　明治三十九年七月、南北屯田兵村の醵金と篤志者の寄付によって建立された。明治三十七・八年の日露戦争には江部乙屯田兵のほとんどが出征しており、戦勝記念碑を建立しようとする気運が高まってきた。このため戦勝祝賀会に続いて、戦死者の村葬も一段落したあと、三沢為吉、野町正禧らが中心となって建設運動をすすめた。この結果、江部乙南北兵村から二七〇円の醵出金があり、更に篤志者の寄付もあって立派な碑が建てられた。

忠魂碑　日露戦争には、江部乙地区では滝川より一一名も多い二六名の戦死者が出ており、国のために殉じた屯田兵及び一般出身の兵士の忠魂を末永く讃え慰霊しようという願いから、在郷軍人会江部乙分会が中心となって村民から寄付を募り建立した。大正二年五月十四日完成、六月八日除幕式並びに招魂祭が執行された。

忠魂碑の題字は林第七師団長が書いたものである。

昭和五十三年八月、滝川市遺族会江部乙地区（代表岩崎秀市）の会員が、「江部乙地区の戦没者を後世に伝え遺そう」と話し合った結果五〇万円を醵金した。この金で既設の忠魂碑に町内出身の戦没者の名前を刻んだ銅板を付設し、五十四年六月六日除幕式をおこなった。

この銅板には日露戦争から太平洋戦争までに戦没した一九五名の氏名が刻まれ、国に殉じた英霊鎮魂のおもい新たなるものがある。

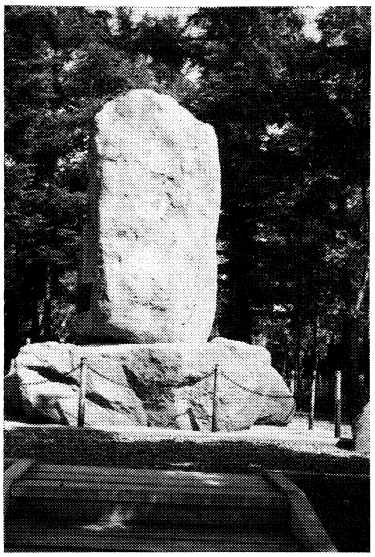
石狩川沿岸道路竣工記念碑　碑の由来は市史下巻に詳述されているので省略するが、この碑はもと旧伏古渡船場入口（西十二丁目地先）に昭和十二年六月に建てられたものである。

戦後、石狩川治水事業が本格的に行われるようになって、工事の障害になるので昭和三十六年五月五日に江部乙神社境内に移設されたものである。この沿岸道路は、度重なる洪水防止と、沿岸地帯の連絡、出水時の避難道路という多目的なもので、これを造るために期成会をつくり全村一丸となって完成したものである。

特に、苗穂刑務所の模範囚一〇〇人が応援して工事の進捗を早めたという事実や、対岸の両竜村民が、この沿岸道路により自村の洪水被害を危ぶんだという史実も残されている。

風雪九十年屯田魂の碑　江部乙屯田親交会が呼びかけ、親交会以外の有志の浄財も含めて昭和五十八年九月に建立した。題字は屯田二世でもあり、前道議会議員、空知土地改良区理事長寺崎政朝が書き、碑文は江部乙屯田親交会長吉沢省二が撰している。

碑文には、明治二十七年四〇〇戸の屯田兵が入植以来九〇年を経た今日、屯田兵後継者は静かに往時を偲び、屯田兵とその家族が遺した不撓不屈の開拓精神と不滅の偉業を讃え、之を後世に伝えるた



風雪90年屯田魂の碑

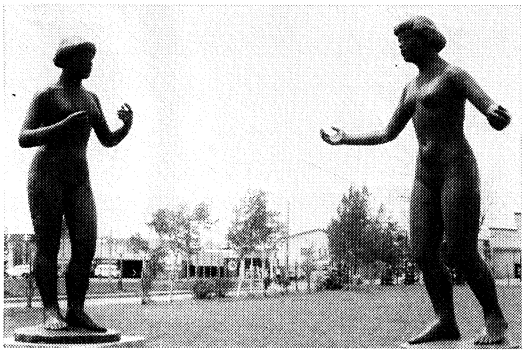
めに記念碑を建立した旨記されている。

11　江部乙市街

江部乙社会福祉協議会顕彰碑　昭和四十六年五月二十日、江部乙町社会福祉協議会十五周年記念事業として公民館敷地に建てた。

題字は、元町長鞍田武夫である。江部乙町は、環境衛生、献血運動等で大きな成果をあげており、厚生大臣はじめ道知事他諸団体から一〇回以上の表彰を受けたことを記念して建てたものである。

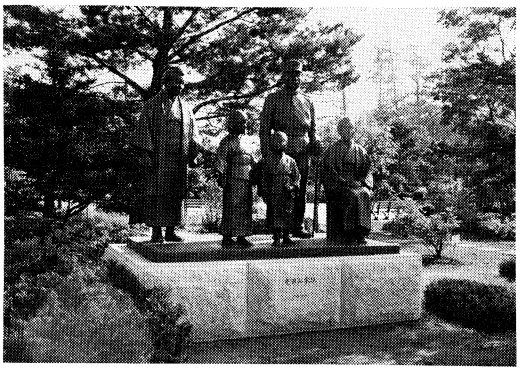
合併記念ブロンズ像「姉妹像」　滝川市、江部乙町の合併十周年を記念し、いっそうの融和発展を願い、昭和五十六年九月一日、農村環境改善センター前に建てられたものである。像は、二体の裸婦像からなり、姉妹像と名づけられている。制作者は小樽在住の彫刻家鈴木吾郎である。



合併記念「姉妹像」

開拓の像（江部乙町東十一丁目農村環境改善センター前）

滝川市開基一〇〇年記念事業の一つとして、江部乙町の改善センター前に建立された等身大五体のブロンズ像は「開拓の像」の名称で、平成二年七月一日開基一〇〇年記念式典に先立って早朝にその除幕式が行われた。制作者は道展会員の鈴木吾郎で、文化センター前の合併記念「創造」・改善センター前の「姉妹像」や、滝川駅前の「希望と躍進の群像」など本市にはゆかりの深い彫刻家である。



開拓の像

五体の像は、屯田兵と、その妻、その子男児と女児、それに屯田兵の母を配し、服装も当時を模したものである。建碑の由来は、ブロンズ像の台座に記した碑文に譲るが、この改善センターの裏手には、滝川市文化財として復元された屯田兵屋も建てられており、滝川市が屯田兵の移住によって拓かれた街であることを偲ぶのに最もふさわしい場所となった。

△碑文▽　偉業を讃える

明治新政府は、北海道の開拓と北方警備の任務を課した屯田兵制を明治七年一〇月に公布した。滝川市に屯田兵が入地したのは、滝川地区に明治二三年四四〇戸、家族含めて一九三一名であり、江部乙地区には明治二七年に四〇〇戸、家族合わせて一七八八名の人びとである。屯田兵制度には、土地・家屋・農機具の支給などの優遇策はあったが、その反面きびしい軍事訓練と規律が課せられていたのである。

遠く家郷を去り、困苦欠乏に堪え、風雪と闘いながら家族肩を寄せ合い助け合って、昼なお暗い原始林を切り拓いた往時を偲ぶとき、市民ひとしく畏敬の念を禁ずることはできない。

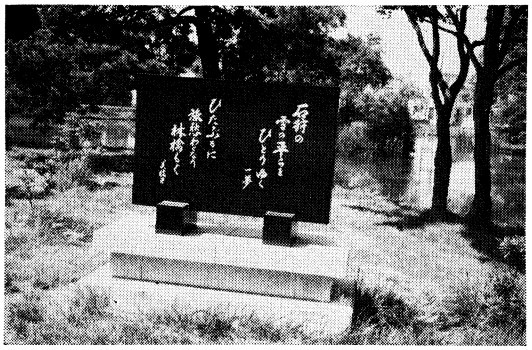
滝川二世紀に向かって隆々発展しつつある滝川市勢の基礎は、まさにこれら先人の汗と涙の結晶で構築されたものといっても過言ではない。開基一〇〇年の記念すべき年に際し、その労苦に感謝し偉業を讃えるとともに、今後一層の発展を期して、市民が心を一つにして前進することを誓いこの像を建立する。

平成二年七月一日　開基記念日に

滝川市長　吉岡清栄

決死の標　江部乙町西十一丁目の児童公園内に建てられている。

この近辺は、もと江部乙屯田兵の練兵場であり、その跡を示す標柱も建っている。屯田入植の年に日清戦争がおこり、翌二十八年、屯田兵四〇〇名が練兵場の一隅にあるニレの木の下に集まり「決死の標」を建て一死報国を誓った。その後、日露戦争はじめ、数多くの事変、戦争に出征するに際して、この決死の標の下で妻子や親族と別れの盃を交わし、また凱旋のねぎらいを受けたのもこの場所であった。昭和十五年、皇紀二六〇〇年を記念して、現在の石碑が建てられたものである。屯田兵が練兵後、木陰で休憩したというこのニレの大木も昭和三十七年に枯れ、現在の樹はその後、新しく植えたものである。



江部乙中央公園内榛谷一夢、美枝子句碑

榛谷一夢、美枝子句碑　江部乙町西十二丁目中央公園内に、昭和六十二年六月二十六日、榛谷一夢、美枝子句碑建立実行委員会（会長早弓房松）が、公園の池の南側に建てたものである。

一夢の本名は清水といい、大正末期から昭和十三年まで江部乙町で医院を開業して町民の医療に尽くした。また、町のために自己の所有地を道路用地として寄付し、今も「榛谷通り」として親しまれている。ホトトギス派の俳人として知られ、町の文化振興にも功献している。一方、長女の美枝子も高浜虚子や石田雨圃子などに師事し、作句活動を通じて江部乙の俳壇に尽くし、現在は札幌に在住しているが、今なお句作活動を続けている。

なお、美枝子の最初の夫、大野四郎も俳句に親しみ、白城の名前で作句活動をしたが、軍医として従軍中、南方戦線で戦死をした。

美枝子は、後に江部乙出身の画家、故一木万寿三（市政功労者）と再婚し、万寿三の絵画を滝川市美術自然史館に寄贈し、美術振興に尽した功績により紺綬褒章を受けている。

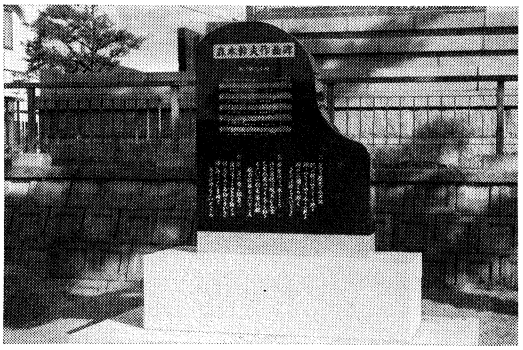
江部乙公園設置記念碑　現在は江部乙中央公園と改称されている。もと、この辺は泥炭地で荒れていたが、市街地域の発展につれて住民憩いの場、防火施設の一助となることを願って、有志一同相談し、池を掘り樹を植えて昭和五年七月公園とした。この碑は、町制施行記念事業のひとつとして、昭和二十七年七月五日に建立されたものである。碑は池の南側、大樹の下に建っている。

北辰小学校碑　江部乙町東十一丁目、農村環境改善センター前に昭和五十年建立された。碑には北辰小学校の跡と、校歌が刻まれ

ている。北辰小学校は、明治二十七年七月十六日陸軍省建設による校舎で授業を始めたのが起源である。同年十月、滝川北尋常高等小学校として認可、次いで明治二十九年北辰尋常高等小学校と改称された。その後、幾多の変遷を経たが、南・北両分校と、東陽小学校を統合することになり、昭和五十年三月三十一日閉校し、四月一日から江部乙小学校と校名を変更した。この碑は、八十一年の伝統をもった北辰小学校を偲び、旧校舎跡に建てたものである。

森本幹夫作曲碑（江部乙町西十二丁目江部乙中央公園）

平成二年九月八日、江部乙中央公園の一角にグランドピアノをかたどった黒御影石造りのユニークな碑（台座を含めて高さ一・九メートル、幅〇・九メートル）が、文子未亡人はじめゆかりの人びとによって除幕された。これは、長年にわたり音楽教育活動や地域の文化発展に情熱を傾けた故森本幹夫の顕彰碑であり、碑面には彼が昭和二十八年に作詞作曲した「新江部乙小唄」の楽譜と歌詞が彫り込まれている。



森本幹夫作曲碑

森本幹夫は、大正四年に江部乙に生まれ、小学生のころからバイオリンを習い、旧制滝川中学校在学中には吹奏楽団を編成して校内外で演奏活動をするほど音楽好きであった。昭和八年から小学校教員として勤めたが、音楽指導に熱を入れ、江部乙新響音楽協会を設立して地域の音楽振興にも活躍した。昭和十三年に応召し、華南や北千島などで軍隊生活を送り、敗戦後シベリアに抑留もされているが、この間にも「バリ島の印象」や「北千島兵団歌」をはじめ多くの作品を残している。

昭和二十三年に復員して再び教壇に立ったが、ますます音楽教育に情熱を燃やし、室内楽団を編成して辺地校の訪問演奏したり、空知音楽教育連盟創立運動に活躍するなど管内の音楽教育に貢献した。

再び北辰中学校（現江部乙中学校）に戻るや、同僚の松浦欣也とともに同校のオーケストラを昭和三十七年から四年連続して全国大会に出場させるなど大活躍をした。

その後、昭和五十年に退職するまでに、地域の歌など数多く作詞作曲を手がけ、退職後も郷土史「ゆうべおっと」の編集や、江部乙文化団体協議会（文団協）の理事長をつとめるなど、地域文化の向上に寄与し、道教委表彰はじめ、滝川市文化功労章、市政功労奨励章など数多くの表彰を受けている。

昭和六十年十一月十九日に死去したが、生前の音楽仲間や教え子たちが、「幹の会」を結成して故人を慕い毎年六月最終土曜日に集まって交流し故人を偲んでいる。

この作曲碑建立も、これらの人びとの発議であり、昭和六十三年六月に開かれた第一回「森本幹夫作品を歌う会」の席上提案されたものである。これによると、平成二年は滝川市開基一〇〇年の節目

にあたり、森本幹夫没後五年を迎えるので、その機会に顕彰歌碑を建立しようと建立実行委員会（委員長の村井俊博は古くからの知人であり、音楽仲間でもある。現在は道立日高少年自然の家勤務）を組織した。

碑建立を決めてから三年余の歳月を経て立派な碑が建てられたのであるが、この建立委員会の呼びかけに応じたのは、森本幹夫とともに文化活動をした人、音楽教育に情熱を傾けてきた人、戦友、知人、隣人・教え子と多彩な顔ぶれで町内外二五〇人余の人びとであった。

特に実行委員会とともに積極的に行動したのは江部乙文団協の嘉見光義会長を中心とする有志者であり、これら多くの人びとの熱意により故人の業績は燐然として後世に伝えられることとなったのである。建碑の費用一九五万円余は、すべて浄財で賄われている。

なお、未亡人の文子も江部乙文団協の中で活躍しており、また、長女、二女ともに音楽教諭として父の遺志を継いでいる。

あいがもの碑

あいがもの碑　江部乙町東十一丁目の北海あいがもセンター（滝川振興公社江部乙事業所）前に、あいがもの碑が建っている。

これは、滝川振興公社が昭和六十年九月三日に、あいがもの霊を慰めるために建てたもので、あいがもの等身大の彫像の台座に、設立の趣旨が次のように刻まれている。

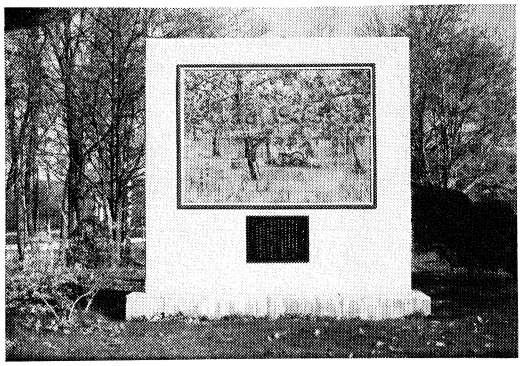
北海あいがもは、昭和五十九年二月、有限会社江部乙農産より飼育経営を継承し道内外に高級肉として広く愛用されている。ふ化してから二か月余の短期間で食肉に供される運命は、その命のはかなさをしのびがたきものがある。しかしながら、生活文化の向上に伴う人類の生存に欠かせない衣食の喜びを与えてくれることに使命観を持ち達観してさまようことなかれと念じ、併せて感謝の意をこめてあいがもの碑を建立した。もって瞑されんことを。

昭和六十年九月三日　　株式会社滝川振興公社

滝川北高等学校改築記念碑　江部乙町東十一丁目高校敷地内　昭和六十二年十月二十四日建立

この記念碑は異色とも言える碑で、高さ三・五メートル、横四メートルの大きな碑面に、色彩陶板を組み合わせたりんご園風景と、碑文を彫った黒御影石をはめ込んだものである。

色彩陶板一枚は、たて一五センチ、横約一八センチで造られており、全体で一七四枚（横二・七メートル、たて一・九メートル）を組み合わせて一枚の風景画となっている。陶板の制作者はもと滝川市に在住していた陶芸家清

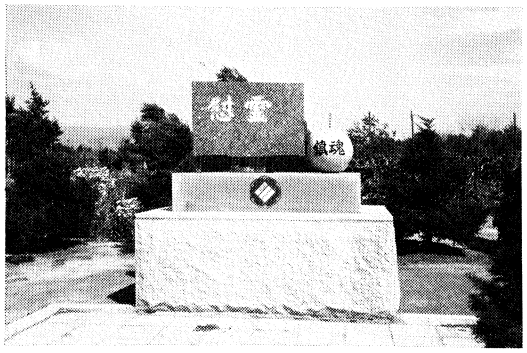

滝川北高等学校改築記念碑

水省次（もと屯田かま主宰、現在新十津川で登りがま主宰）である。なお、碑文には建碑の由来が記されているが、内容は第九編教育に掲載したので本節では省略した。

光明寺御堂建立記念の碑　江部乙町東十二丁目光明寺境内　昭和十一年十二月建立

光明寺本堂改築の記念碑で、撰は沙門行善、題字は元江部乙村助役西田亨が書いている。

鍬　塚　江部乙町東十三丁目道路を国道から東に約二キロメートル進むと一号支線道路と交差する。この四つ角の北西一隅に鍬塚の碑が建っている。二段積みの軟石を土台に約二メートルの高さの仙台石で作ったものである。この碑の由来は、滝川市が建立した標柱「芽生村塾跡」にあるので詳述を避けるが、町に土地を寄贈した横山春一の善意と農村青年指導に対する情熱に感謝し、江部乙町が昭和三十二年三月にこの碑を建立した。碑銘、碑文は元町長鞍田武夫が書いている。



緑寿園物故者慰霊の碑

緑寿園物故者慰霊の碑　江部乙東十三丁目滝川市立養護・特別養護老人ホーム敷地内に、昭和五十六年九月二十三日秋分の日に建立された。碑は方型に慰霊、円型に鎮魂の文字が刻まれ、共に、市長であり、社会福祉事業団理事長の吉岡清栄が碑銘を書いている。碑文には、昭和五十年五月この老人ホーム建設以来六年を経過し、亡くなった方も漸次出てきたので、これらの人々を慰霊するために建立した旨書かれている。

江部乙第二尋常小学校分教場跡の碑（東十九丁目丸加山麓）

この分教場は通称石川団体分教場と呼ばれ、大正七年十一月十日に江部乙第二尋常小学校（後の東陽小学校＝現在は江部乙小学校に統合）分教場として設置された。この近くには石川団体の農場のほかに、宮崎農場・堀井農場があり、子弟の通学上分教場設置が認可されたのである。しかし、余りにも奥地であるために、入植者は生活上の不便さから開拓地から去る者も多く、したがって児童数も減ったために、大正十二年三月末で廃場となった。

昭和五十六年九月に、かつての関係者が母校を偲び資金を募って記念の碑を建立したものである。

江部乙第二尋常小学校分教場跡の碑

碑は、自然石で造られ、衆議院議員渡辺省一が題字を書いている。

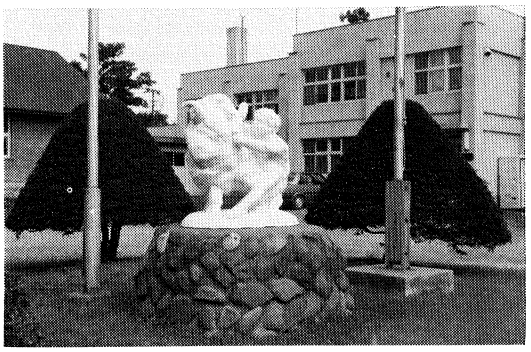
東陽小学校の跡　江部乙町東十八丁目国道東側の旧東陽小学校グランドの一隅に建っている。碑は自然石の大きなもので、その横に校章・校歌も刻まれている。過疎による児童数の減少と校舎の老朽などから、江部乙小学校に統合され、昭和五十年三月三十一日閉校となった。同校は、大正四年九月五日の開校で、昭和五十年が開校六十周年に当っているため、閉校記念と六十周年記念を合わせて同校PTAが、閉校した母校を偲んで建立したものである。

江部乙十八丁目の地蔵　江部乙町東十八丁目バス停留所の西側に等身大の地蔵が建っている。この地蔵尊は、昭和三十六年六月二十六日、六歳の男の子が交通事故で死亡したため、その親が子どもの供養と、交通事故のおきないことを願って、個人で建立したものである。

12　東滝川方面

羊にたわむれる児童の像　道立滝川畜産試験場事務所前に、昭和三十三年九月十日建立された像である。制作者は日展会員の山脇正邦で、玉石練り積みの土台の上の白セメント彫刻の少年と羊の像は牧歌的雰囲気をかもし出し、種羊場としてのイメージをいっそうひきたてている。

獣魂碑　畜産試験場内の旧神社跡地の森の中に建てられているこの碑は、試験場で飼育中に死んだめん羊をはじめ小動物の霊を弔うために昭和五年十月二十日に建立されたものである。玉石づみ基礎コンクリート土台の上に獣魂碑と彫られた碑がある。



羊にたわむれる児童の像

獣魂碑と鶏魂碑

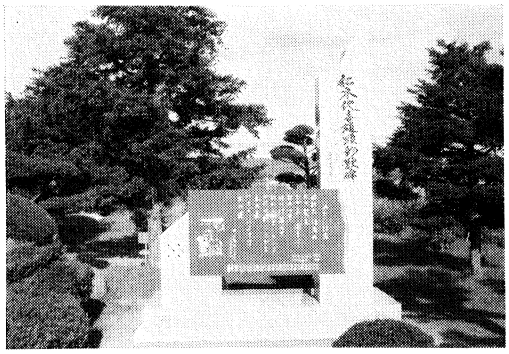
鶏魂碑　畜産試験場の獣魂碑と並んで建っている。昭和五十二年十一月に建てられたこの碑は、もと、当試験場で養鶏の仕事に従事していた職員瀬川たつ子（昭和五十年十二月二十七日没）の遺志により建立されたものである。

仁木他喜雄顕彰歌碑（東滝川町JR東滝川駅前広場）

童謡「めんこい仔馬」の作曲家・仁木他喜雄の顕彰歌碑が、平成二年九月五日東滝川駅前広場に建立、除幕式が行われた。碑を建立したのは地元東滝川の住民を中心とした顕彰歌碑建立

期会（井上正雄会長）で、有志の寄付金と北の生活文化振興事業の補助金などで賄った。仁木他喜雄は少年時代の一時期、この東滝川で過ごした後、上京し数多くの歌謡曲を作曲しているが、その経歴、碑建立の由来などについては、別項の滝川市の史跡「仁木他喜雄の家の跡」に詳細記述したので、ここでは省略する。

昭和三十三年五月十三日、五七歳で没しているが、生存中一七〇曲を作曲、編曲は七〇〇余曲、葬儀はコロムビアの社葬を以って執り行われたことを付記する。なお、彼の代表曲としては、めんこい仔馬・高原の月・別れても・サヨナラルンバ・銀座の雀などが挙げられており、歌手の二葉アキ子や排優の森繁久弥らとの親交の厚かったことでも知られる。地元の東栄小学校教頭川西勝のデザインによるユニークな碑には「めんこい仔馬」の歌のテープが内蔵されており、ボタンを押すことによって駅前広場に懐しいメロディが流れる仕組になっており、滝川の新しい名所の一つとなっている。



仁木他喜雄顕彰歌碑

なお、この碑の題字は、故人と親交の厚かった排優森繁久弥の書である。

空知川の延命地蔵尊　新町六丁目居林建設事務所の東隣りに建てられている。明神町二〇二番地（現三丁目四番）に住んでいた甲野こうは、四国讃岐（香川県）出身で信仰心厚く、明治時代から空知川が開発の動脈として多く使われ、その仕事のために水死した人や、洪水や遊泳で命を落とす人も多いことから、これらの人びとの慰霊を思いたち、昭和三年春、友人の岩見田ハツエたちと一緒に奉賀帳をまわして募金につとめた。山崎石屋に地蔵尊を作ってもらおうと相談に行ったところ、「今すぐには造れないので札幌の石屋にある地蔵さんを送ってもらいましょう」という返事であった。

札幌から送られてきた地蔵尊は、たいへんおだやかな容貌で、自分が願っていたイメージにあい、早速四〇円で買いとったという。

甲野こうは、この地蔵尊に名前が欲しく、郷芳寺の初代住職の木曽郷芳に伺いをたてたところ、「延命地蔵尊がよかろう」ということになり、金刀比羅神社境内に祠を建て開眼供養をしたという。この費用は、募金では間にあわず自分たちで出し合ったそうである。

その後、同神社から相撲場を造るので移してほしいと言われ、浅井喜作の用地に移したが、これまた空知川堤防工事の障害になるということで、昭和四十一年に現位置に移したものである。

その後、この地蔵尊の人気が高まり、滝川はもちろんのこと、新十津川はじめ、遠くは札幌・苫小牧からも詣る信者が増え賑わったというが、四代続いた堂守りも昭和五十年ごろから不在となり、今は無人化となっている。なお、甲野こうは、四国八十八ヶ所の霊場めぐりを終えた昭和二年に、信者に呼びかけ、一人一体から二人一体で観音菩薩像建立を計画し、合計三三体の菩薩像を滝川墓地に建

てている（この項は、そうらっぷち一八号　宗教特集号を参考にした）。

第四節　地・水神宮と農業関係の碑

明治二十三年、同二十七年と相次いで入植した屯田兵とその家族たちは、遠く故郷を離れ未開の土地で、淋しさや困苦に耐え、軍事訓練も課せられた中で、昼なお暗い原始林を切り拓き沃野と成し、今日の滝川の発展の基盤を築いた開拓の功労者である。

衣食住も劣悪な条件にあって、風雪とたたかいながら将来の発展に夢を托し、汗と涙にまみれて開墾に従事したこれらの人びとが、一家の安全と豊作を願い、古来の風習に基づいた地神宮や水神宮を建立し、心のよりどころとして神様に祈るということは、当時の状況から容易に察することができる。

このため、市内の農村地域には、近隣の人びとが協力し合って建てた地神宮や水神宮が数多く残されており、今もなお、これらの地域では、豊作と安全を祈願するならわしが続けられている。

江部乙11の1農事組合地神宮

しかし、時代の変遷とともに、農地が宅地や商工業用地に転換されることも多く、これらの地神宮や水神宮の存在価値も失せたり、除去されたところもあるやに聞く。開基以来一〇〇年を経た今日、これらの地神宮や水神宮の記録を留めておくことは、開拓の歴史をひもとく資料であるとともに、報本反始に通ずることでもある。

また、滝川の基幹産業としての農業の振興開発に市を始め国・道の行政としても重点的に長年にわたって、かん排水事業や基盤整備事業を進めており、これら事業の完成を祝した記念碑なども建てられているが、これまた滝川の歴史をなぞるためにも重要な資料となることであろう。

本節では、こうした意図から、農業に関連した碑を特別に掲載したが、地・水神宮関係分全部と記念碑一部については、江部乙町在住の郷土研究家山本三郎の調査に基づいたものである。

滝川東2丁目地神・水神宮

（註）山本三郎は、江部乙屯田兵で同町の村会議員等を歴任した山本政吉の三男で、中空知農業共済組合を退職後、郷土の史跡や屯田兵のことなどの研究に取り組んでいる。